三重県埋蔵文化財調査報告 91

県道合ヶ野・松阪線道路改良事業に伴う

鳥戸遺跡発掘調査報告

── 松阪市伊勢寺町所在 ──

1990・3

三重県埋蔵文化財センター

序

松阪市西部、堀坂山麓より東流する堀坂川によって形成された扇状地は、松阪地内でも有数の遺跡の密集地帯として知られています。

県道合ケ野・松阪線道路改良事業は、松阪市伊勢寺鳥戸の集落を迂回するバイパス道路として建設計画がたてられました。

鳥戸遺跡は、周知の遺跡であったので、その保護に努めるよう協議してまいりましたが、遺跡が広範囲に広がっており、道路の設計変更が不可能なためやむなく発掘調査を行うこととなりました。その結果、鳥戸遺跡では奈良〜平安時代の竪穴住居等が発見され、扇状地の扇央部の集落の一端が明らかになりました。

ここに調査結果を報告し、この報告が今後の文化遺産の保護、さらには当地域の歴史解明の一助として活用されれば幸いです。

調査にあたっては、県土木部道路建設課、松阪土木事務所、松阪市教育委員会の関係各位、また現地にあっては堀坂川沿岸土地改良区をはじめ、地元伊勢寺地区の方々の惜しみない理解と協力を得ました。文末ながら、記して心より感謝の意を表します。

三重県埋蔵文化財センター

所長　中林昭一

例　　言

1．本書は県道合ケ野・松阪線改良工事事業に伴い緊急発掘調査を実施した松阪市伊勢寺町字鳥戸・上相田に所在する鳥戸（トリド）遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は次の体制で行った。

　調査主体　三重県教育委員会

　調査担当　三重県埋蔵文化財センター　　主　事　　田中　久生　　主　事　　穂積　裕昌

3．調査にあたっては、県道路建設課、松阪土木事務所、松阪市教育委員会、堀坂川土地改良区ならびに地元各位の方々の協力を得た。

4．発掘調査後の出土遺物の整理を上記の担当者の他、松本春美、渡辺智子、藤田充子が行い、遺物の写真撮影は主事　江尻健があたった。

5．報告書作成にあたっては、倉田直純、山田猛、泉雄二、伊藤裕偉の諸氏をはじめ多くの方々の助言を頂戴した。

6．本書の執筆・編集は、穂積が担当した。

7．挿図の方位は全て磁北である。

8．本書で用いた遺構表示略記号は下記による。

　ＳＢ；竪穴住居、ＳＤ；溝、ＳＫ；土坑

9．写真図版の遺物の番号は、実測図の番号と対応させてある。

本　文　目　次

Ⅰ	前言	1
Ⅱ	位置と環境	3
Ⅲ	層序	4
Ⅳ	遺構	4
Ⅴ	出土遺物	9
Ⅵ	まとめ	16

図　版　目　次

ＰＬ１　調査前風景・作業風景

ＰＬ２　竪穴住居ＳＢ８～ＳＢ11・竪穴住居ＳＢ25とＳＢ27

ＰＬ３　土坑ＳＫ15・溝ＳＤ１、２

ＰＬ４　全景

ＰＬ５　各遺構出土甕・包含層出土甕

ＰＬ６　包含層出土甕

ＰＬ７　溝ＳＤ２出土土器・土坑ＳＫ４出土土器

ＰＬ８　縄文土器・製塩土器

ＰＬ９　包含層出土須恵器、灰釉陶器・緑釉段皿・墨書土器

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図

第２図　遺跡周辺地形図

第３図　調査区位置図

第４図　調査区土層断面図

第５図　遺構平面図

第６図　ＳＤ１、２土層断面図

第７図　ＳＫ22土層断面図

第８図　調査区地区割概念図

第９図　主要遺構実測図

第10図　各遺構出土土器実測図

第11図　ＳＫ４出土土器実測図

第12図　包含層出土土器実測図

第13図　包含層出土土器実測図

第14図　包含層出土土器実測図

第15図　包含層出土土器実測図

10. スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
　各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

Ⅰ　前　　言

1　調査に至る経過

県道合ケ野・松阪線改良工事事業は、近畿自動車道松阪インターから松阪市街地へ抜けるアクセス道路として計画、事業化されており、この間の経緯については、同事業に伴ってすでに調査されている前沖遺跡の発掘調査報告書に記されているとおりである。

今回調査をおこなった鳥戸遺跡は、農林水産部が事業主体である当地域（堀坂川沿岸地区）の県営圃場整備事業に伴って昭和62年度に試掘調査が行われ、すでに遺跡範囲の概略は知られていたわけであるが、さらに詳しい資料を得るため昭和63年12月に事業地内の第一次調査を行った（試掘調査）。

その結果をもとに県土木部道路建設課および松阪土木事務所と協議を行い、その保存策などを検討した結果、事業予定の道路センター杭№18プラス３ｍから№29プラス16ｍについては保存不可能のため、第２次調査を行うこととなった。

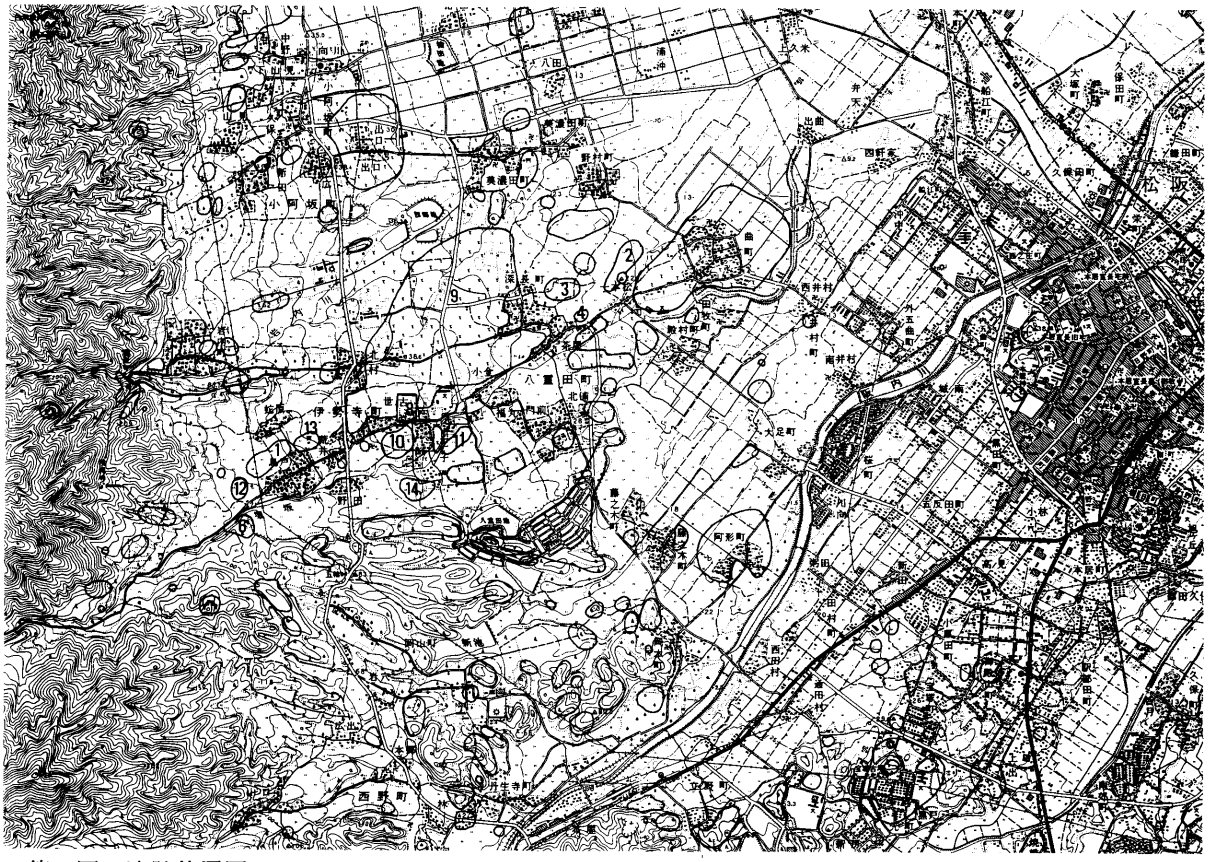
調査は平成元年５月12日に開始し、７月14日にはすべて終了した。最終調査面積は2280㎡であった。

2　調査の方法

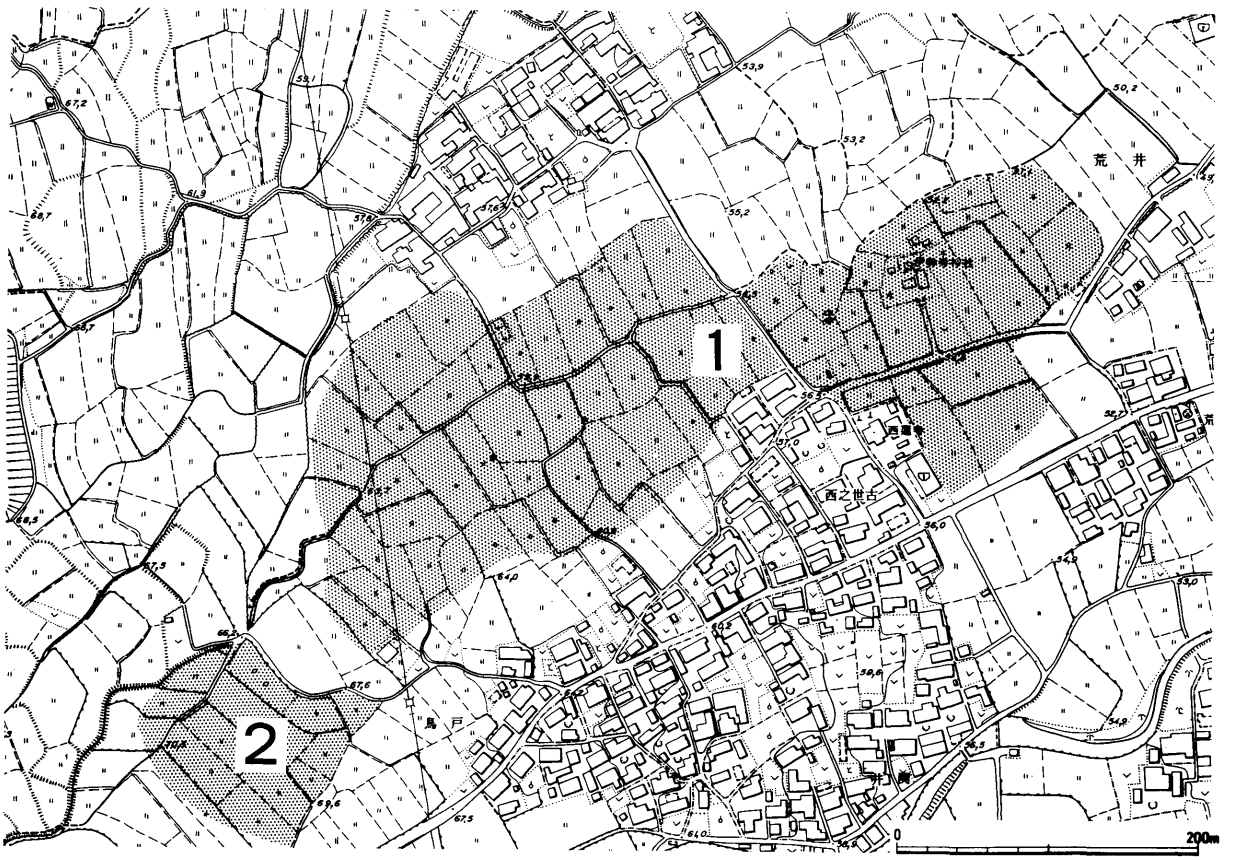
調査区の総延長が228ｍに及び、その間に車道が１本走っていたが、それを除くとほぼ東西方向の一直線のトレンチであった。そのため、発掘区内の地区設定にあたっては、すべて通しで４ｍ×４ｍのグリッドを基本に、北から南にアルファベット、西から東に数字の番号を与え、地区名は北西隅の杭を基準とした。なお、遺構番号は、発掘区西側の遺構から順次通し番号で与えた。

発掘は西側より開始し、表土と無遺物層をバックフォーにより掘削を行い、その後は人力により包含層の発掘を行った。調査時期が水田耕作時期と重なり発掘区両側の田は稲が植えられていたため、排土をトレンチ両側へ積み上げることができなかった。そのため、掘削により生じた排土はその都度ダンプカーにより排出した。

作業風景



第１図　遺跡位置図　1.鳥戸遺跡　2.杉垣内遺跡　3.堂ノ後遺跡　4.本堂遺跡　5.瑞巌寺古墳群　6.平林古墳群　7.下文珠古墳群
8.伊勢寺廃寺　9.伊勢寺遺跡　10.大垣内遺跡　11.大坪遺跡　12.榎長遺跡　13.上相田遺跡　14.向王寺Ｂ遺跡



第２図　遺跡周辺地形図（１．鳥戸遺跡、２．榎長遺跡）

Ⅱ　位置と環境

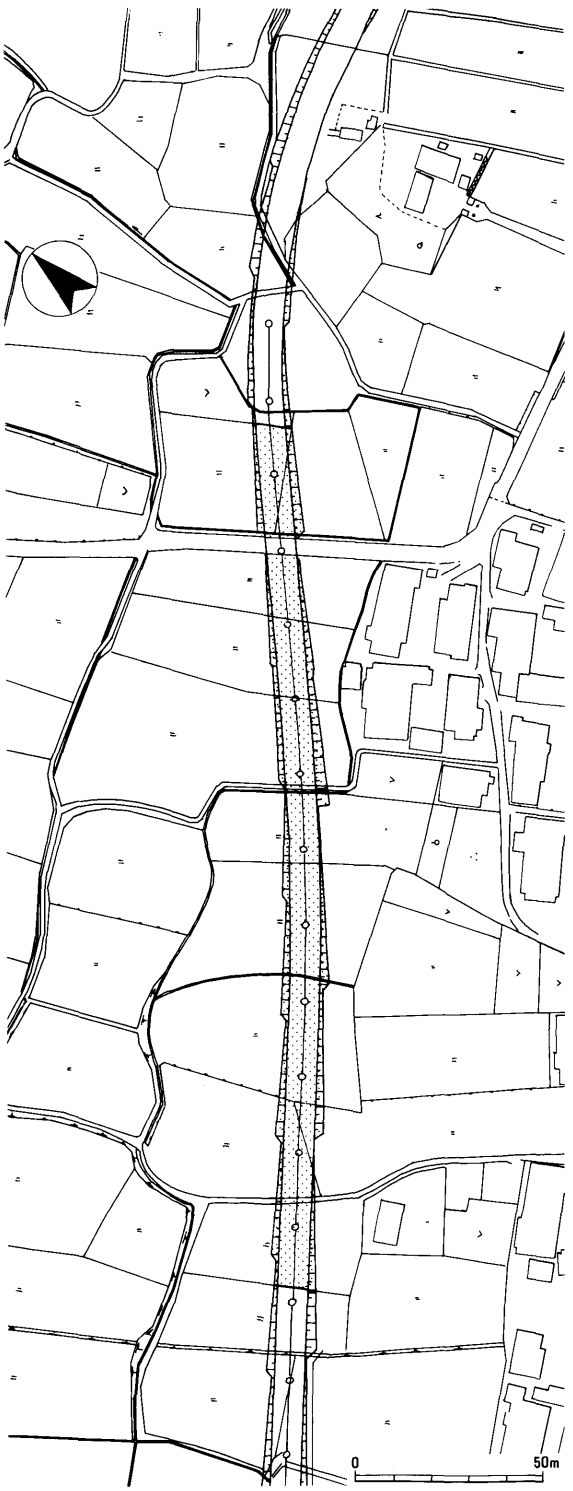
鳥戸遺跡は、松阪市伊勢寺町に所在し、一志地塊の丘陵を開析して東流する堀坂川が形成した扇状地の扇央部左岸の段丘上に立地する。そのため、遺跡の西端と東端とでは、遺構面で約７ｍもの標高差がある。この扇状地は、北は瑞巌寺付近から東へ延びる低い舌状丘陵、南は堀坂川右岸の一志地塊から延びる丘陵によって南北を区切られており、地理的にはこの範囲が一つのまとまった小地域として発展してきたものと思われる。これは、現在の行政区画上の伊勢寺町の範囲よりも若干狭い。

現在の知見によるかぎり、鳥戸遺跡周辺での本格的な遺跡形成は古墳時代以降で、それ以前については遺物が断片的に知られるに過ぎない。

古墳時代の集落については、鳥戸遺跡の立地するような扇央部には遺跡はなく、扇状地先端部の深長町杉垣内遺跡[1]、堂ノ後遺跡[2]、本堂遺跡[3]などの存在が知られる程度である。これに対し古墳時代後期の群集墳は、扇状地を取り囲むようにして周囲の丘陵上に造営されており、これら群集墳のほとんどは横穴式石室を内部主体とする。これをやや詳細にみてみると、瑞巌寺古墳群[4]のように６世紀前葉にまで造営開始時期が遡り、山の尾根上に直線状に立地するもの、平林古墳群[5]のように６世紀後半の造営開始で丘陵上にまとまって立地するもの、下文殊古墳群[6]のように７世紀代の造営開始で丘陵斜面に立地するものなどいくつかの類型に分かれるようであり、造営集団の差異や群集墳自体の歴史的な変遷を考えるうえで興味深い。

これら群集墳が終焉をむかえた後、この地に白鳳寺院の伊勢寺廃寺[7]が造営され、これと相前後して伊勢寺廃寺周辺、つまり扇状地の扇央部にも多くの集落が形成されるようになる。堀坂川左岸の伊勢寺廃寺北方に広がる広大な伊勢寺遺跡[8]はその代表であり、堀坂川右岸でも大垣内遺跡[9]や大坪遺跡[10]などは現在こそ現集落で分けられているものの当時は伊勢寺廃寺を中心とするひとつの遺跡として捉えることができる。鳥戸遺跡も西隣の榎長遺跡とともに同じような流れの中で捉えることができよう。

古代寺院としての伊勢寺廃寺が廃絶した後も、この地の集落は途絶えることなく、中世には、上相田遺跡[12]や向王子Ｂ遺跡[13]など新たな集落も形成しつつ、現在にいたる。



第３図　調査区位置図（scale＝1／2,000）

Ⅲ　遺跡の層序

今回調査を行った地点は、昭和63年度県営圃場整備事業によってすでに遺跡上面が削平及び盛土がなされており、整地土としたものはすべてこの事業に伴うものであり、所々みられる撹乱もこれに相前後する時期のものである。従って、調査地の層序がすべて安定して遺存していたわけではなかった。

調査区西端と東端では検出面で約７ｍの標高差があったが、これは遺跡が扇状地扇央部に立地していて、調査区がそれに直交するかたちで長いためである。土の堆積量は、調査区西端の海抜の最も高いところは薄く、東側の海抜の低い所に行くに従って厚くなっていく。

確認した土層のうち、遺跡の基盤となるのは黄褐色土であり、検出した遺構もすべてこの上面でおさえられた。また、この面で任意にトレンチを設定してさらに50cm程度掘り下げてみたが、土は変わらなかった。

黄褐色土は調査区全体でみられるが、そこより上の層序は傾斜地ということもあって安定していなかった。これらの層の多くは、山手より何回にもわたって土砂が流れてきて形成された自然堆積によるものと、整地層直下の暗青灰色シルト（10）や暗灰色土（20、21、27）等の圃場整備前の旧耕作土のような人為的な層に分けられ、それらが交互に堆積している。しかし、包含層出土遺物の多くが検出面近くの下位の層からの発見であること、調査区西端で中世の遺構が若干見つかっているものの全体としてみれば奈良～平安時代の遺構、遺物が中心をしめることより、中世以降は集落はなく、耕地であったと推定される。

また、後述するように調査区のＤ・Ｅ・Ｆ－22・23・24区周辺では多量の奈良～平安時代の土器が検出された。これらは検出面より黒灰色粘質土（45・49）をはさんだ上の層である黄褐色砂（29・30）で多く発見されたが、この層の上面で遺構は確認できなかった。

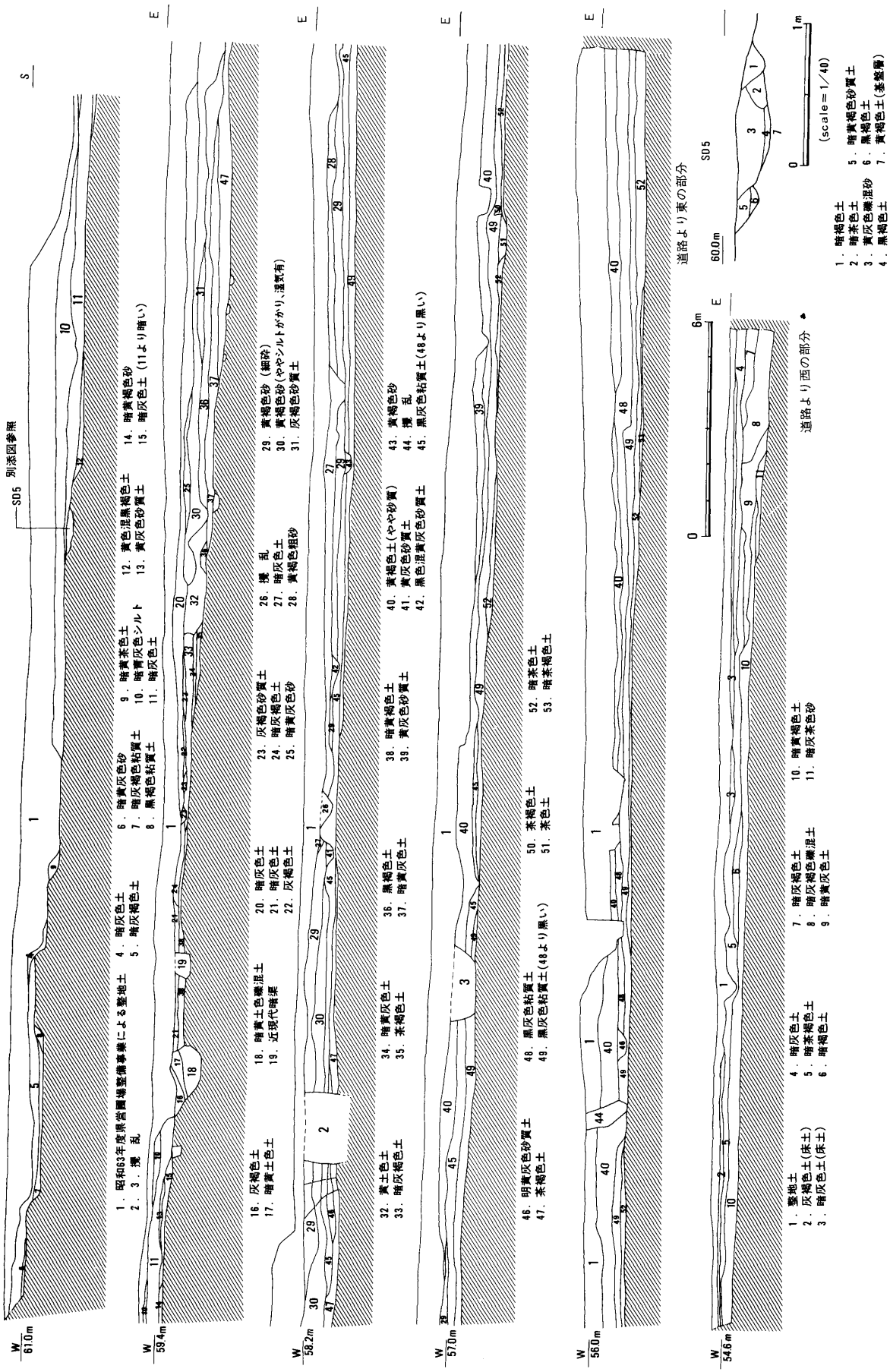
Ⅳ　遺　構

（１）竪穴住居

ＳＢ８～11　すべて切り合っており、最も新しいＳＢ８は短辺2.2m、長辺は南側が撹乱のため不明であるが2.5m以上あり、長方形プランになる。短辺である西側に２基のカマドがあるが、付け替えであるのか住居自体の建て替えによるものかは確定できなかった。ＳＢ９はＳＢ８に切られているが、規模的には長辺４、短辺2.9mとＳＢ８よりはやや大きい長方形プランを持つ。ＳＢ８に壊されているものの、西カマドを持つ。ＳＢ８・９に切られ、また撹乱のため壊されていて全体の規模、プランは不明ながら、もう１棟の竪穴住居の存在が確認でき（ＳＢ10）、ＳＢ９の北側にも三角形状に残った堀り方があってさらに１棟の竪穴住居の存在（ＳＢ11）が推定される。その他、点々と焼土の残るところがあるが、さらに別の竪穴住居の重複があるかどうかは確定できない。所属時期については、図上に示しうるほどの土器は出土していないが、最も新しいＳＢ８からは奈良時代に比定しうる土器が出土している。ＳＢ８～11は竪穴住居自体の遺存度は良かったものの、ごく最近の土建業者による撹乱により一部壊されていたことは遺憾である。

ＳＢ16　長辺3.5m、短辺2.6mの長方形プランをもつ。４本の主柱穴をもつが、検出面の土質と埋土自体の差異はあまり明瞭ではない。出土遺物より、平安時代前期のものと思われる。

ＳＢ20　ＳＫ18やＳＤ19などに切られているが、長辺3.6m、短辺３ｍのプランをもった竪穴住居であると思われる。時期決定に足る遺物はなく、時期は不明である。



第4図　調査区土層断面図（scale＝1／160）

ＳＢ24　長辺3.8m、短辺３ｍの長方形プランをもつ。焼土などはなかった。床面より奈良時代の土器が出土している。

ＳＢ26　ＳＢ27に重複して建てられた長辺3.4m、短辺2.5mの長方形プランを持つ竪穴住居。焼土はないが、３つのコーナーに柱穴を確認できる。埋土中より奈良時代の土器が出土している。

ＳＢ27　ＳＢ26に切られているが、長辺3.2m、短辺2.8mのプランをもつ。焼土はないもののＳＢ26と同じようにコーナー付近に柱穴をもつ。埋土中より奈良時代の土器が出土している。

（２）土坑

ＳＫ３　南側半分が調査地区外にあるために全体規模は不明であるが、東西約５ｍ、深さ25cm－35cm程である。山茶碗片が少量出土している。

ＳＫ４　南北長径約4.8m、東西長径3.8m、深さ40cm程のＬ字状プランの土坑である。埋土中より近世の遺物が比較的まとまって出土した。

ＳＫ12　短径170cm、長径220cm、深さ10cm程の楕円形プランを有する土坑。奈良時代～平安時代のものであろう。

ＳＫ13　直径2.2mから2.3m、深さ20cm程のほぼ円形プランを有する土坑である。出土遺物より平安時代前期のものであろう。

ＳＫ14　北側が調査地区外にあるため全体規模は不明であるが、短径280cm、長径320cm以上、深さ７cmを測る長方形プランの土坑になると思われる。竪穴住居址である可能性もあるが、焼土や柱穴は確認できず、全体プランも不明なため、確定できない。出土遺物より奈良時代後半のものであろう。

ＳＫ15　ＳＫ13と同じような直径２mから2.2m、深さ10cm程の円形プランを有する土坑である。平安時代の遺物が出土している。

ＳＫ17　北側が調査地区外にあるため全体プランは不明である。残存長径50cm、深さ10cmほどであるが、この土坑が存在する周辺の検出面の土質が砂礫質であるためプランの確定は困難である。平安時代後期の遺物が出土している。

ＳＫ18　長径1.4m、短径1.2m、深さ15cm程の土坑でＳＤ19を切る。ただし出土遺物をみると、ＳＤ19と同じ平安時代後期のものである。

ＳＫ21　長径1.5m弱、短径1.2m、深さ22cmの不定形の土坑である（第９図）。出土遺物より奈良時代のものであろう。

ＳＫ22　長径１ｍ、短径0.6m、深さ20cm弱の楕円形プランの土壙である。壁面が焼け、埋土も全体に炭混じりであり、骨片らしきものも出土していることにより、火葬墓と思われる。副葬品と思われる平安時代前半の坏片が出土している。

ＳＫ23　一辺1.1m、深さ20cm程の正方形プランの土坑である。平安時代前半のものであろう。

ＳＫ25　長径１ｍ、短径0.8m、深さ20cmの楕円形プランの土坑である。出土遺物より奈良～平安時代のものであろう。

ＳＫ28　北側が調査地区以外のため全体プランは不明である。長径４ｍ以上、短径2.8m、深さは８～15cm程度の隅丸の長方形プランになると思われるが、人為的なものではなく自然のものである可能性もある。出土遺物より奈良時代のものであろう。

ＳＫ29　北側の残存度が悪いため全体プランは不明であるが、短径2.2m、長径2.5m以上、深さ８～20cmの土坑である。竪穴住居址の可能性もあるが、焼土や柱穴等は確認できず、出土遺物もなく所属時期は不明である。

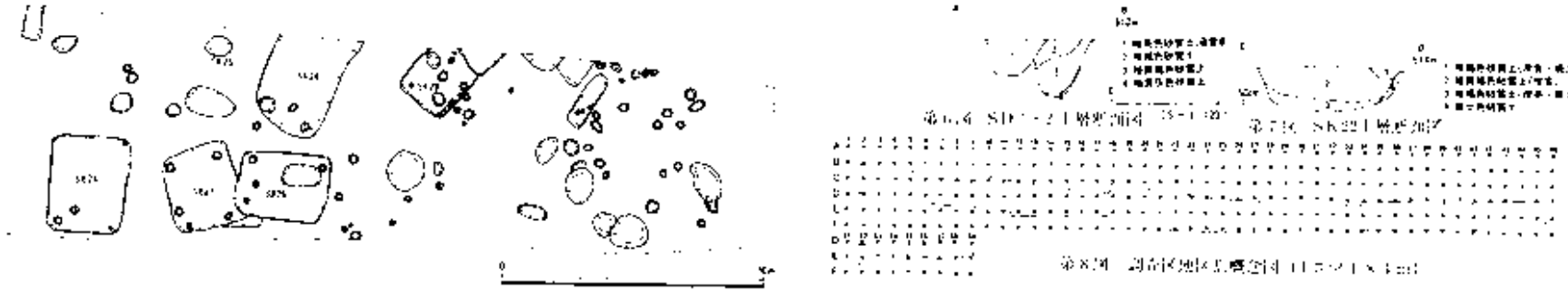
（３）溝

ＳＤ１～２　発掘西端を走る溝。両溝は重複しており、ＳＤ１がＳＤ２を切る。幅30cm～40cmと狭いものの、東流してきた溝がほぼ直角に曲がって北流し、また再び直角に曲がって東流するなど、人工の区画溝的な性格が強い。ＳＤ２から室町時代の鍋、羽釜などが出土しており、ＳＤ１もＳＤ２と同じようなプランを持つことより、時期的に近接した頃のものと思われる。

ＳＤ５～７　ＳＤ５は発掘区西部を北から南へ走る幅約80cm～120cm、深さ約25cmの自然流路である。ＳＤ６・７はＳＤ５に併行してくるが途中から流れを東に向けてから合流する自然流路である。

SD6は幅20cm～80cm、深さも検出面から深いところで40cmを測るが、ＳＤ７は幅約20cm、深さも10cm以内とやや小さい。地形自体が東へ向けて低くなっているため、途中から検出不能となった。いずれの溝も時期決定にたる出土遺物はなく、所属時期は不明である。

ＳＤ19　ＳＢ20を切る幅約80cm～120cm、深さ10cm以下の浅い自然流路。出土遺物より平安時代後期のものと考えられる。

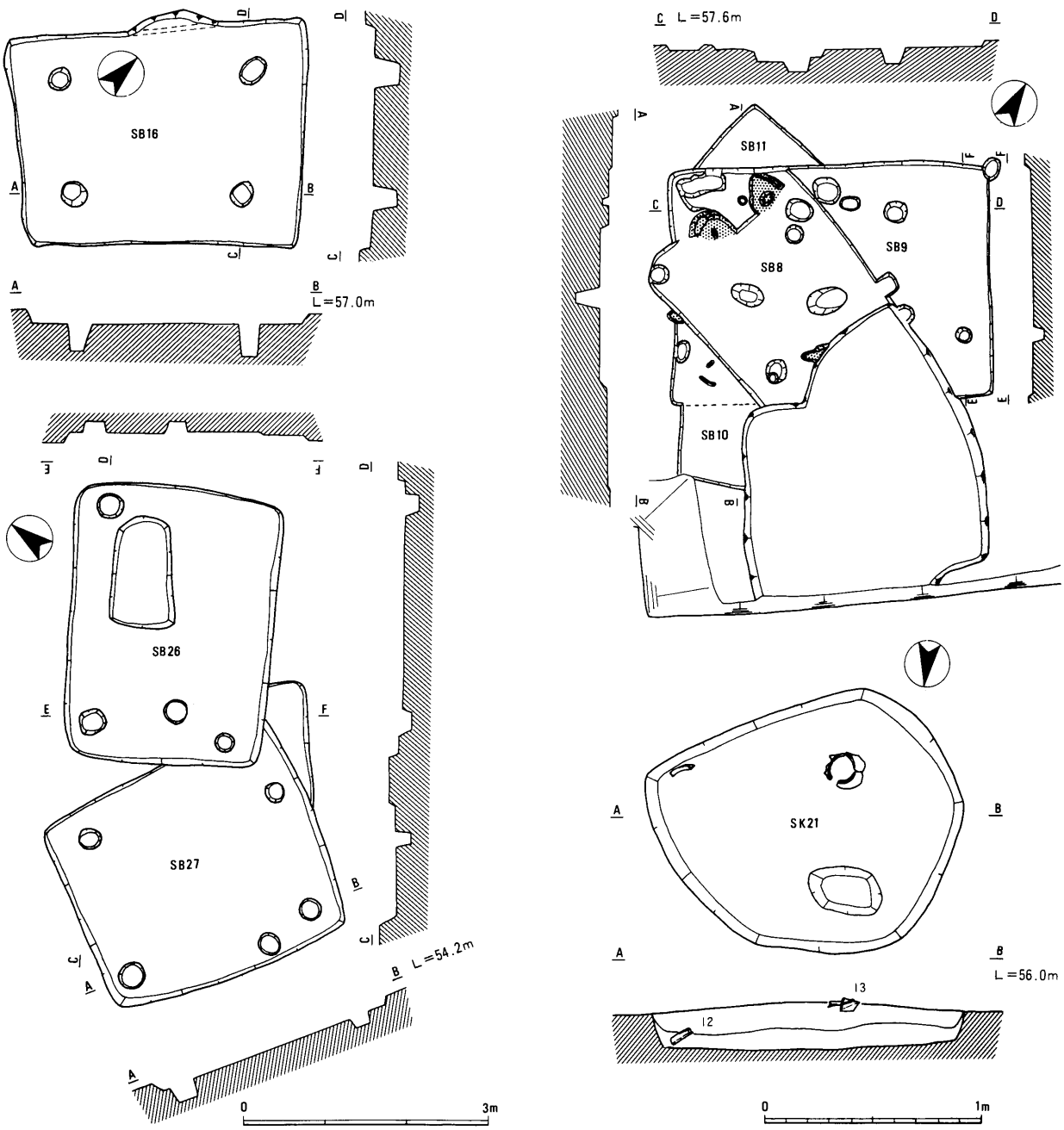


第6図 SD[illegible]-2 遺構平面図 (1:[illegible])

第7図 SK[illegible] 遺構平面図

第8図 調査区南北土層断面図 (1:[illegible])

第9図 調査区南北土層断面図 (1:[illegible])



第９図　主要遺構実測図（SK21のみ１／30、他は１／80）

Ⅴ　出土遺物

（１）遺構出土の遺物

個々の遺物の紹介は土器観察表に譲り、比較的まとまった資料を中心として紹介していきたい。

ＳＤ２出土遺物　（42～44）　ＳＤ２は規模も小さく埋土の差異もない溝であり、資料的な一括性は高いと思われる。羽釜は口縁上端部に強いヨコナデを施し、面を持ちつつやや内傾する。鍋はいわゆる「南伊勢系鍋」[14]であり、小皿は器壁の極めて薄いものである。16世紀のものであろう。

ＳＫ４出土遺物　（第11図）　ほうろく（45）、摺鉢（46～47）、染付け（48～49）、陶器底部（50～51）がある。染付けは、白地に青色の色調をなす。

ＳＫ13出土土器（17～24）　平安時代前期に時期的な主体をおくものの、若干の時期幅がみられる。甕は大型（23～24）と小形（20～22）があり、大形は口縁部上端面に水平の面を持つものである。土師器坏は口縁部にヨコナデ、胴下部及び底部にユビオサエを施した、器壁の薄いものである。

ＳＢ16出土土器（14～16）　甕３点を図示しえた。このうち、14～15は小形の甕で体上部内面で口縁部と接する部分を強くナデている。16は口縁部外端面が面をもって立ち上がる大形の甕で、内面体下半部をヘラケズリする。平安時代初頭に比定できる。

ＳＫ17出土土器（37）　黒色土器の椀で、内面だけ黒い黒色Ｂ類で平安時代後期に属する。

ＳＫ22出土土器（35）　内面に放射暗文をもつ土師器椀である。ＳＫ22への副葬品と考えられる。平安時代前期のものであろう。

ＳＫ21出土土器（12～13）　層位的に、埋土上層出土の13と下層出土の12に分けることが可能である。おそらく、13は混入したものであろう。12は口縁部があまり肥厚せずにおわる奈良時代の土器で、13はハケメの間隔が粗く、口縁部の外反度の弱い平安時代後半の土器である。

ＳＢ24出土土器（４～10）　４～５・10が床面の出土で、あとは埋土中の出土である。４～５は口縁外端に面をもつのに対し、６は口縁上端に面を持ち、時期差と考えられる。前者は奈良時代、後者は平安時代前期に比定でき、従って後者は混入と理解される。

ＳＫ15出土土器（27～32）　飛鳥時代の須恵器坏蓋（27）のような明らかな混入品もみられるが、あとはほぼ平安時代前期のものである。31は外面黒褐色、内面黒色を呈する黒色土器の椀で、斎宮跡第44次調査ＳＫ2650[15]に類例のある体上部が内弯気味に立ち上がる器形をなす。

（２）包含層出土土器

縄文土器（52～62）　52～54は口縁部もしくは口縁部付近の破片である。52は口縁部と胴部を隆帯によって区画する土器である。隆帯上に凹点刺突を施し、その隆帯が横位羽状のキザミを施した楕円形区画文を囲む。53は口縁部が肥厚し、その下を沈線で楕円区画し、その中に斜沈線列を描く。54は素文の突帯で楕円状に区画するようであるが、その内部は無文である。55～61は胴部破片である。60は風化が激しいが、条線地の粗製土器、61は無文の粗製土器である。若干の時期幅はあるものの、いずれも中期後葉に属するものと考えられる。

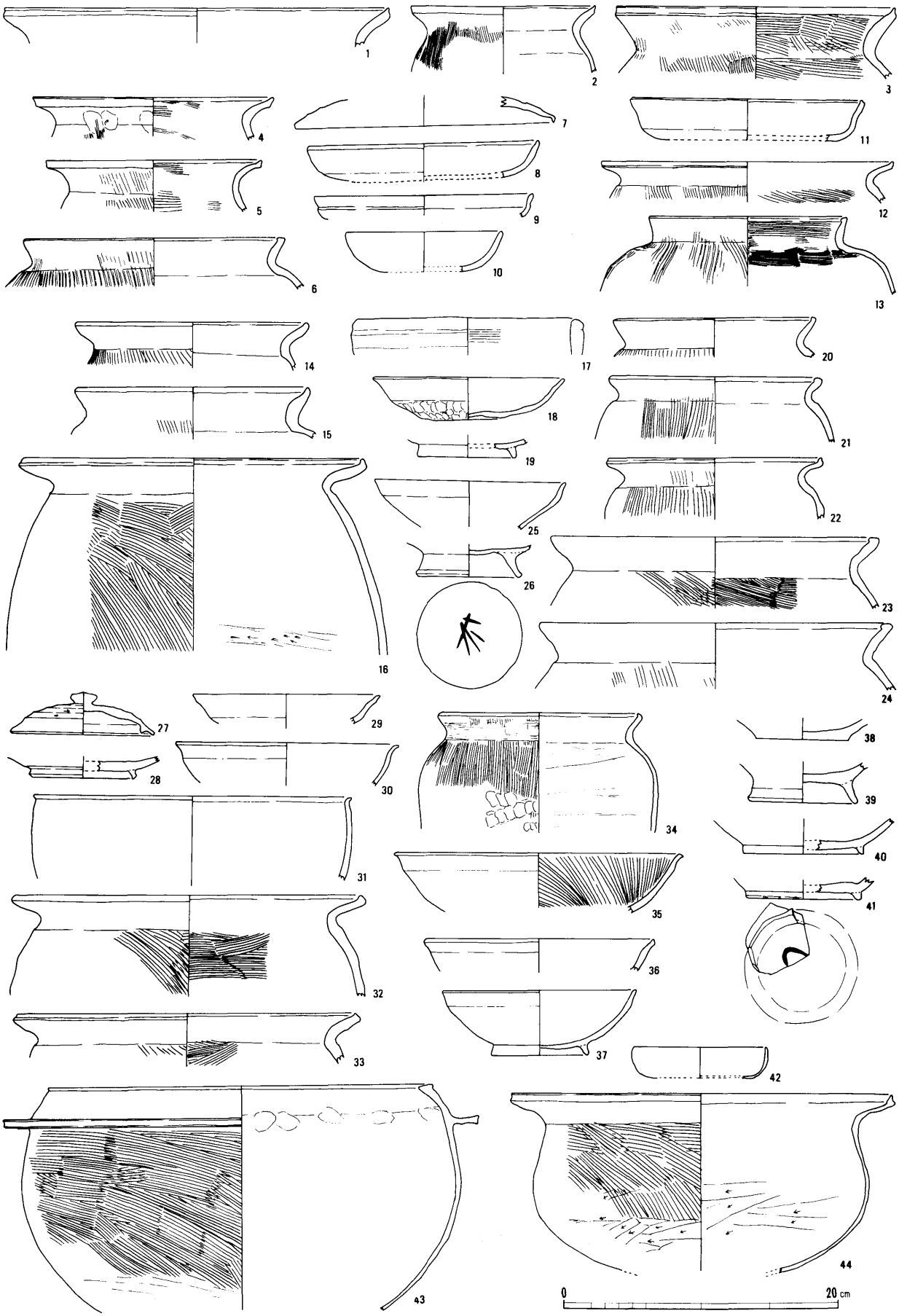
飛鳥時代の土器（150）　須恵器坏身がこの時期のものである。受け部の立ち上がりが退化しており、底部の調整も省略されている。

奈良～平安時代の土器（63～116、118～168）

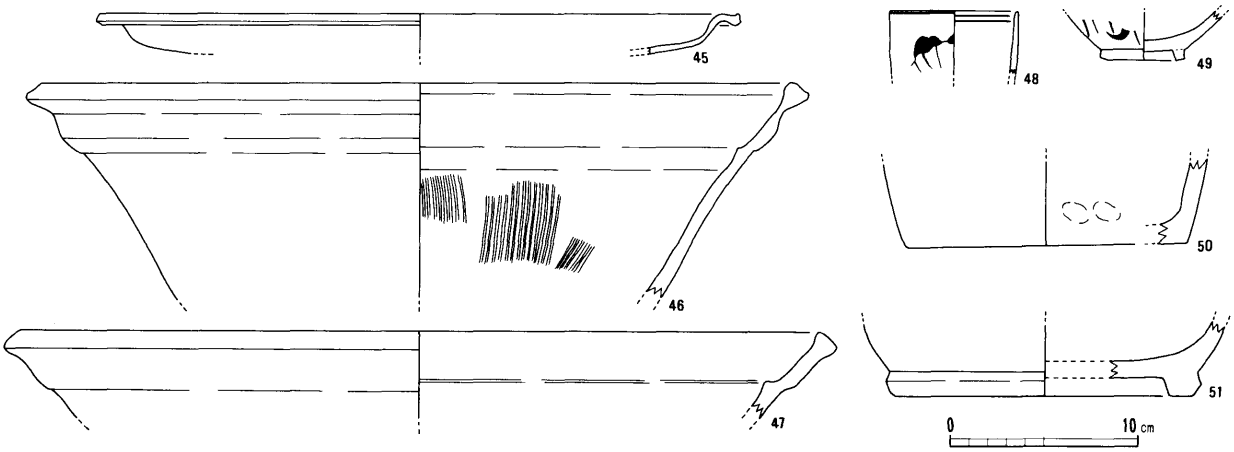
土師器甕（63～116）　図示したものの半数以上が発掘区のＥ・Ｆ－23・24区付近からの出土である。法量をみると、口縁部直径が12cm～23cmを中心とする一群、24cm～32cmを中心とする一群に分けることができ、前者はさらに18cm位を境として二者に分けることが可能である。従って、本遺跡の甕は12cm～17.9cmの小形甕（63～89）、18cm～23cmの中形甕（90～104）、24cm～32cm（105～115）の大形甕に分類できる。このうち、大形甕はすべて長胴甕になるものと思われ、中形甕のなかでも一部は長胴甕になるものと思われる（90～91・93～94・98・100・103～104など）。116は口径39.6cm程の大形品で鍋状の器形で把手の付く可能性がある。どの土器も胎土が良く、小石粒が混じったとしても２ミリ以下のものが少量混じる程度である。

土師器坏（118～123、129～131、137～144）　118～123は平らな底部から直線的に外へ開く器形で主にナデ調整をとる。奈良時代のものであろう。129～131は口縁部がヨコナデによって外反する器形である。130は口縁端部のみやや内弯気味であるが、底部の調整はナデ調整による。平安時代前半でも古い時期に位置づけられよう。137～144はどれも器壁が薄く、外反度が大きくなるものが多い。137は外面のヨコナデの部分が口縁上部のみとなり、指頭圧痕が多く残っている土器である。平安時代前期でも新しい時期のものであろう。

土師器皿（124～127、132～135）　124、127は口縁部が内弯気味に立ち上がる。125は二段に立ち上がり、126は外反して端部がやや内弯する。これらは奈良時代のものである。132～135 はぞれもヨコナデによって外反する器形であり、132は底部の指頭圧痕が良く残る。平安時代前期の古い時期のもの



第10図　各遺構出土土器実測図



第11図　SK4出土土器実測図（S＝1／4）

である。

土師器高坏（128）　脚部の破片である。縦方向にヘラ状工具で面取りを行っている。奈良時代に属するものであろう。

土師器鉢（147）　外反して立ち上がる器形で口縁部は外面に面を持ちつつやや内側へ折り返す。平安時代後期のものであろう。

ロクロ土師器皿（148～149）　148は、糸切り底、149は脚台付きの底部である。平安時代後期～末にかけてのものであろう。

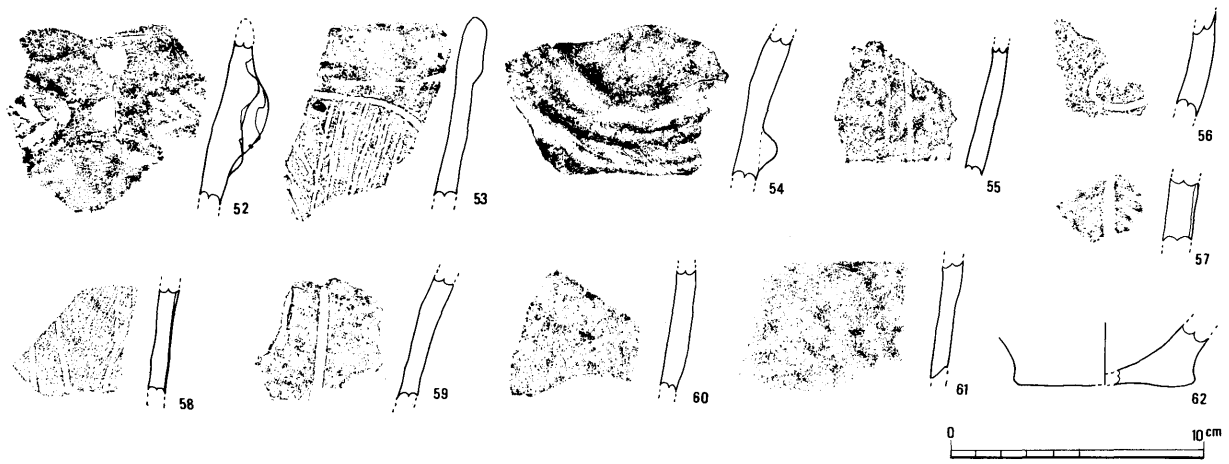
黒色土器（136）　口縁部が内側へ若干肥厚する椀で内面を横方向にヘラミガキする。平安時代前期のものである。

製塩土器（145～146）　145は内側に刷毛状工具を施した痕跡があり、粘土の積み上げ痕も明瞭である。どちらの土器も底部は欠損しているが薄い平底の底部になるであろうことが接合痕からわかる。胎土は小石・砂粒を多く含む。平安時代前期のものであろう。図示した以外にも当遺跡では破片ではあるが製塩土器は比較的目立つ（図版　参照）。いずれも器高は4.5cmから5.5cmの間に収まるものである。

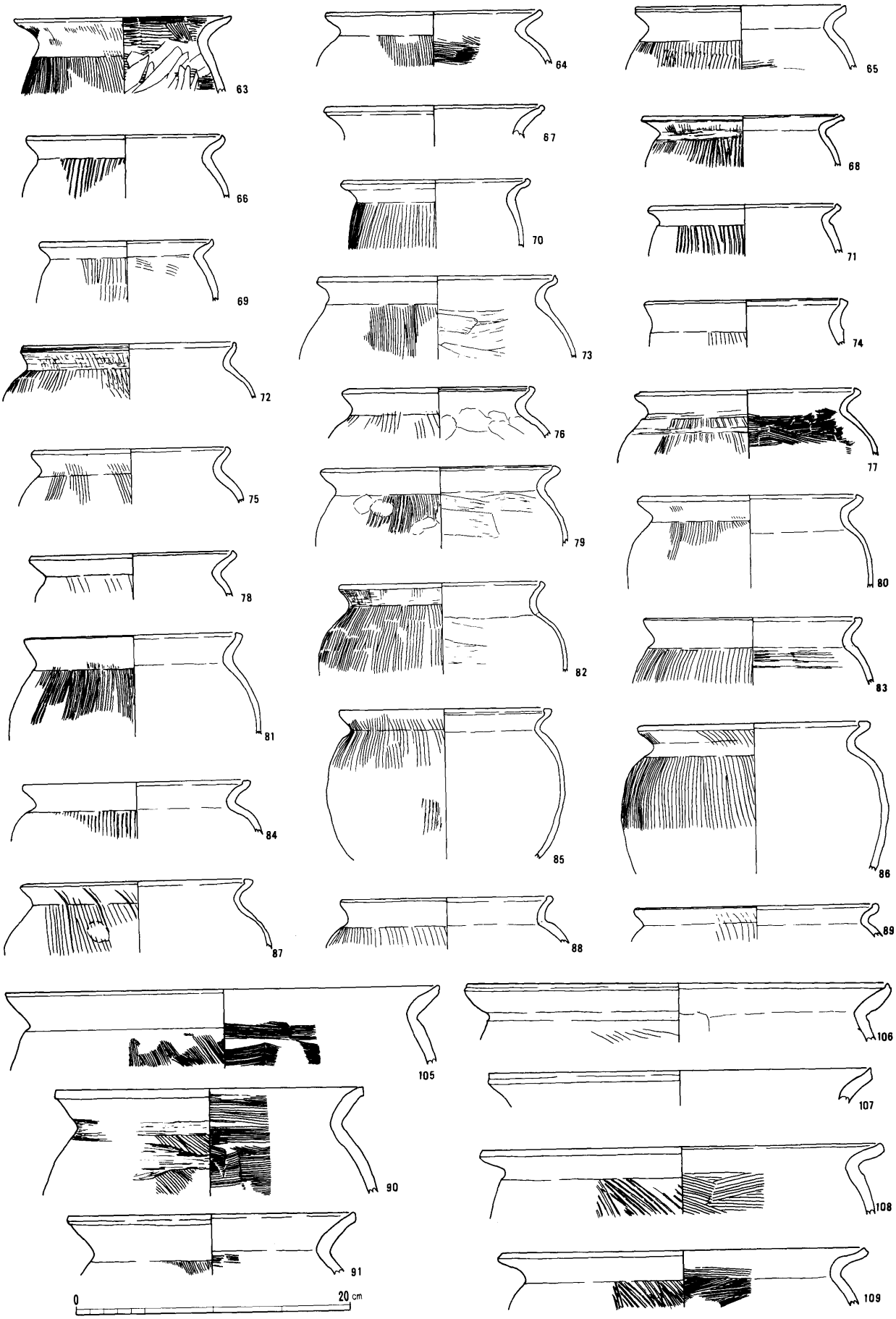
須恵器、灰釉陶器（151～172）　破片が多くすべての時期決定には困難が伴うが、155～159の椀類、160の段皿は黒笹90窯式[16]に比定でき、平安時代前期の新段階にあてることができる。161は壷の底部であろう。172は大形の甕の破片で、肩部が張る器形をなす。

山茶碗（173～174）　高台に籾殻圧痕はなく、断面四角形を呈する。平安時代末期の所産であろう。

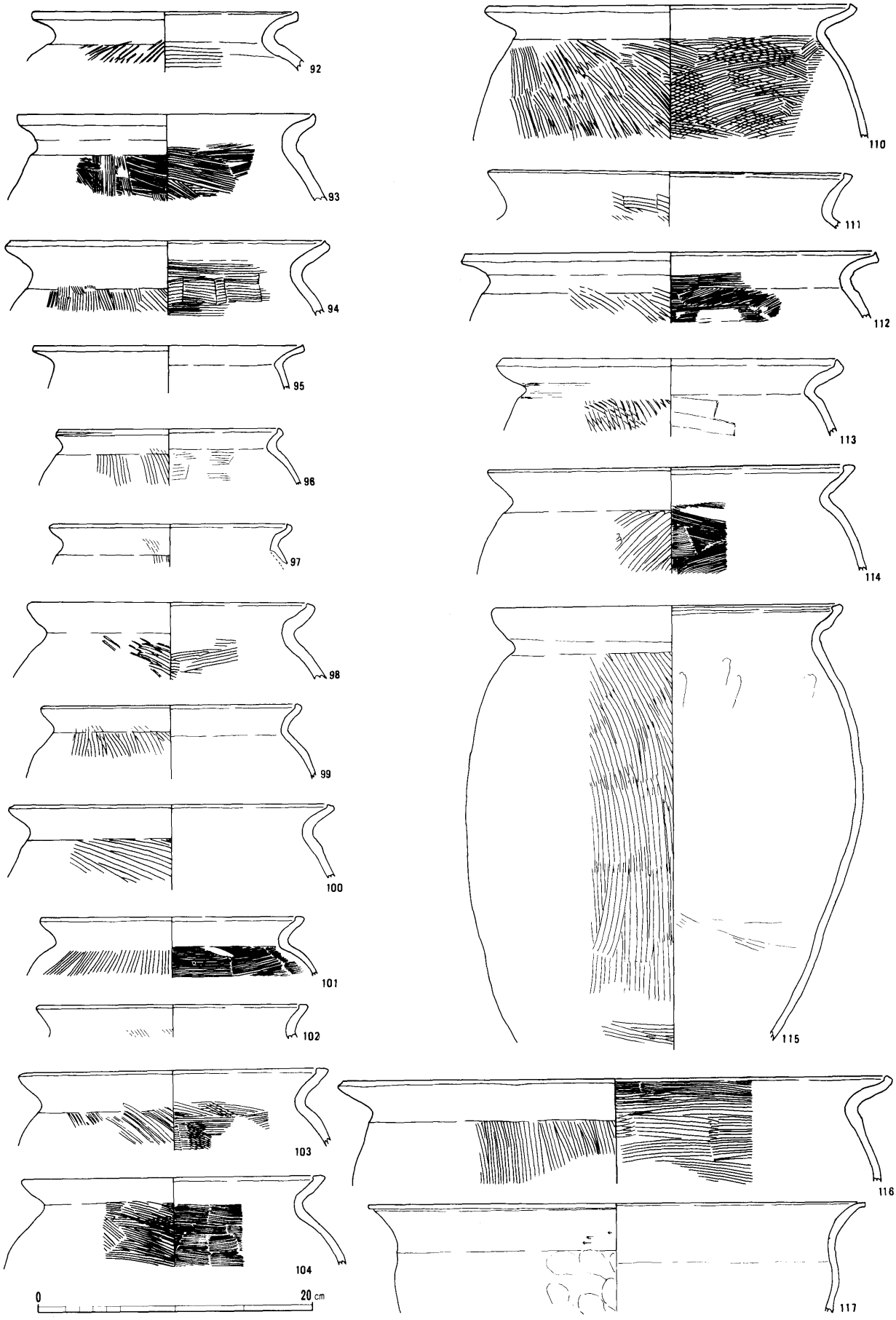
この他に、図示はしえなかったが、縁釉段皿破片（ＰＬ９－ａ）と墨書土器破片（ＰＬ９－ｂ）が出土している。縁釉段皿は硬質である。墨書土器は土師器の皿か坏の底部に墨書されたものである。破片のため読みは明確にしえないが、「鳥」と読める可能性がある[17]。



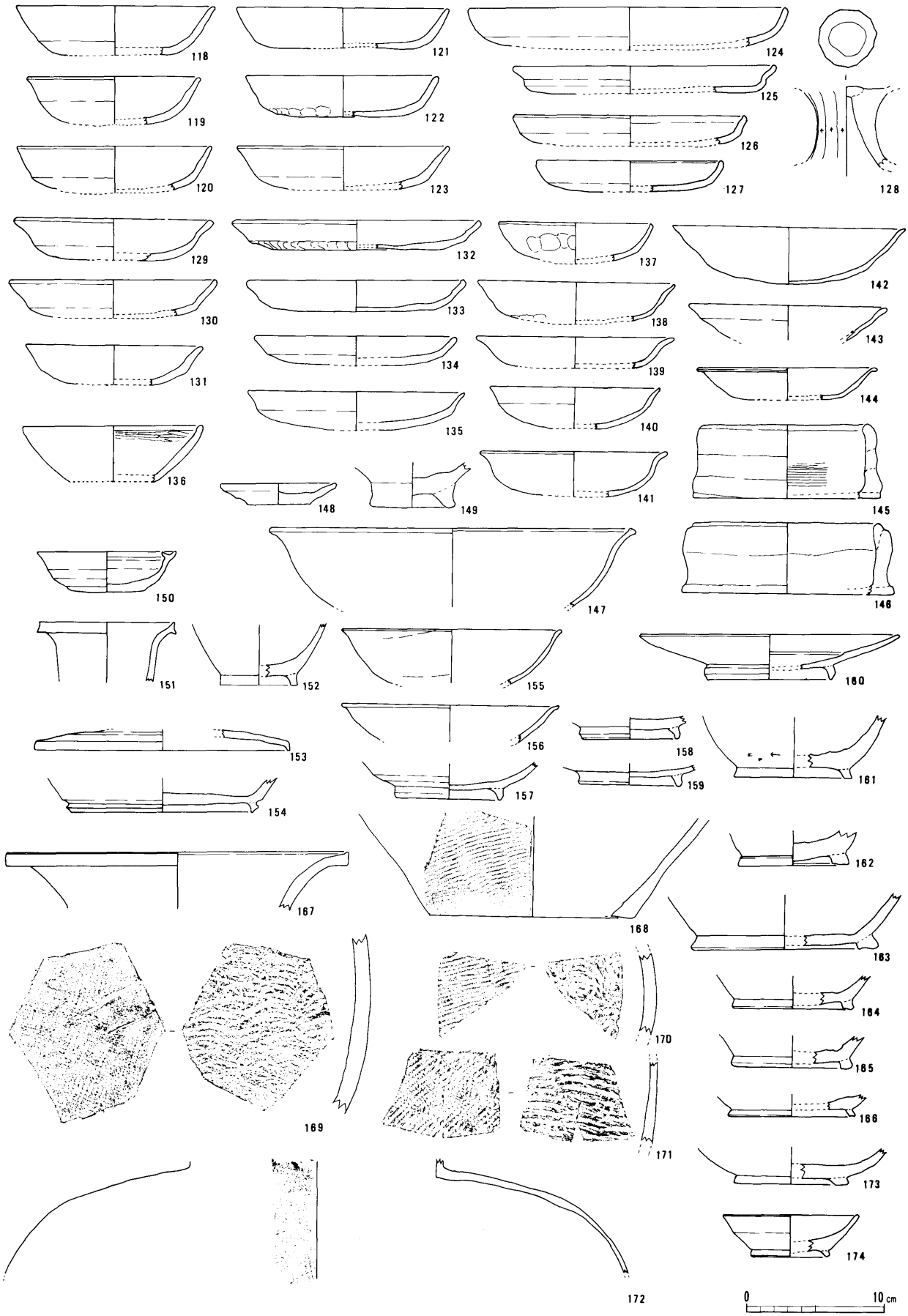
第12図　包含層出土土器実測図（S＝1／3）



第13図　包含層出土土器実測図（S＝1／4）



第14図　包含層出土土器実測図（S＝1／4）



第15図　含包層出土土器実測図（S＝1／4、172のみ1／8）

Ⅵ まとめ

今回の調査は総延長228mの線的な発掘であったが、鳥戸遺跡の性格を考えるうえで、わずかながらも資料提示することができた。ここでは鳥戸遺跡の調査によって得た資料から2、3の問題点を採り上げ、まとめとしたい。

まず、堀坂川扇状地における遺跡立地及び集落形成の問題がある。今回の鳥戸遺跡の調査でも、本格的な集落形成は奈良時代であることが確認された。これは、鳥戸遺跡の西隣に位置する榎長遺跡もおなじである。周辺部の分布調査や試堀調査の所見でも、奈良時代～平安時代前半の遺物密度が多いようであり、前代までの集落の中心でもある扇状地扇端部に加えて、新たに扇状地扇央部へもこの時期に開発が進んだことを示唆している。一般に扇状地では水が覆水流となって地下へ潜るため、集落はその水が湧き水として地上に現れる扇端部に形成されやすいのに対して、扇央部では水が少なく集落立地として不適切である。にもかかわらず、この時期に集落が形成された理由として、伊勢寺廃寺の建立によって周辺部の集落が再編成され、それに伴って新たな集落が扇央部へも拡大した可能性が指摘できる。

出土遺物についてみると、包含層の出土ではあるが、中期後葉に属すると考えられる縄文土器が十数点見つかっている。鳥戸遺跡周辺では、この他榎長遺跡で後期中葉の北白川上層式土器が発見されている[18]。こうした土器は原位置を保つものではなく流れ込みによるものと思われ、堀坂川扇状地より北側の岩内川扇状地では扇頂部に薮ノ下遺跡[19]や新田遺跡[20]などの中後期の遺跡が立地するように、おそらく当時の集落はさらに高い場所に存在した可能性が想定される。

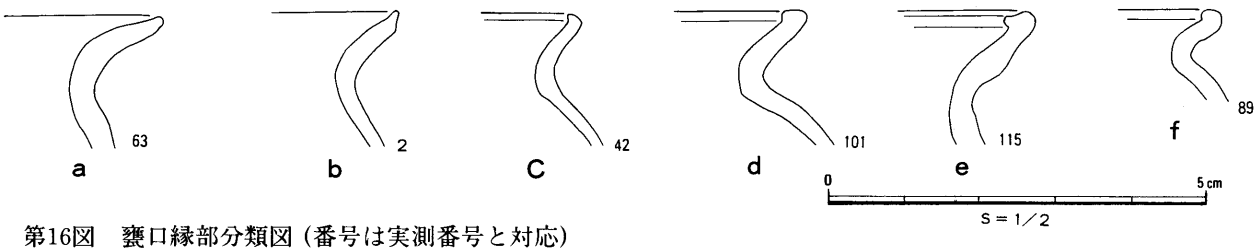
最後に、鳥戸遺跡で最も出土量の多かった奈良～平安時代の土師器甕について、すこし触れておきたい。この時代の甕について、斎宮跡等で良好な一括資料に基づいて編年作業が進んでいる同時代の皿、坏類に比べて不明な点が多い。かって小笠原好彦氏は、近畿地方の7・8世紀の土師器について論じた論考のなかで、外反する口縁部に外面ハケメ、内面ハケメと下半のヘラケズリで特徴づけられる甕を「伊賀・伊勢型」と位置づけた[21]。その後西口寿生氏は、6～7世紀の土師器甕について論じた論考のなかで、南勢の甕を「内面下半のヘラケズリ、口縁外端部の面取りを特徴とする小・中型甕、内面をナデ調整する大型甕を『南勢型』と総称」し、それとは別に口縁部端部を丸くおさめて面をもたず、体部内面をナデ調整する甕を「南勢型」甕とは別の「別種」の甕として認定し、両者が同時期に併存していることを指摘された[22]。

これらの研究史では、内外面の調整技法がひとつの視点となっていることがわかるが、鳥戸遺跡出土の甕は完型品がなく破片資料ばかりであるため、土器全体を通してみた検討はできず口縁部形態を中心とする体上半部の型式学的検討を中心とせざるを得なかった。

まず口縁部の形態に注目してみてみると、

a　外側に大きく外反しながら端部をそのまま丸くおさめるもの
b　口縁部外面がヨコナデによって面をもつもの
c　口縁端部をつまみあげ、そこをヨコナデすることによって外斜面に面をもつもの
d　ヨコナデによる面が口縁部上端面にあるもの
e　さらに強くヨコナデすることにより口縁端面が内傾し、内斜面に面をもつもの
f　口縁端部が内側に巻き込まれ、丸く肥厚するもの

の六つに分類することができる。このうち、SK21ではb類口縁の土器が下層、f類口縁の土器が上層から出土し、SB24ではb類口縁の土器が床面、d類口縁の土器が埋土中から出土している。従って、これらは大きく見るとaからfへ、という変遷が各器種ごとにたどれそうであるが、aとbは斎宮等で同一遺構で共伴しており、この二者については一系列的に変遷するのではなく、それぞれの形の差異は前代から引き継いだ系統差として、これらは同時併



第16図　甕口縁部分類図（番号は実測番号と対応）

存する可能性が高い。

比較的胴部の残存度が良い小形甕の器形をみてみると、ａ類やｂ類口縁をもつ土器では比較的肩が張らず、胴長の器形をなすが、ｄ類やｆ類口縁をもつ土器では肩部が丸く張り、体部がより球形に近くなる。先にみた口縁部形態の差異により時間的変遷の流れが是認されるならば、小形甕においては、時期が新しくなるに従い、胴部が丸みを帯びてくるといえそうである。

次に内外面の成形、調整等についてみてみると、外面はすべてハケメ調整であるが、内面は大きくハケメ調整によるものと、ナデ調整によるもの二種が認められる。このうち、内面をハケメ調整する個体では、多くの場合ハケメ原体を外面と内面で使い分けており、概して内面の使用される原体のほうが細かい。内面をヘラケズリするものがほとんどみられないのは、土器の残存度が口縁部に近い部分に限られていてヘラケズリを施したであろう体下半部分が残っていないためであろうが、比較的胴部の残存しているｄ類口縁をもつ小形甕85や86ではヘラケズリがなされてなく、時期が下るとヘラケズリがされていなかったことも考えられる。ハケメの粗密については、壁面の残存度によって制約されるところが大きいものの、ｆ類のハケメは粗く、傾向としてとくに外面では密から粗への流れが認められるであろう。

これらに編年的な位置を与えるについて斎宮跡出土の土器と比較してみると、ｃ類が斎宮ＳＫ1445出土の甕[23]にその特徴が共通し、その共伴土器から平安時代初頭の時期が与えられる。ｅ・ｆ類についてはともに斎宮ＳＥ2000出土の甕[24]に類例が求められ平安時代後期の時期が与えられる。ｄ類は他のまとまった資料に乏しいが、鳥戸遺跡での安定した存在やその型式学的特徴を勘案すると、ｃ類とｅ・ｆ類のあいだ、すなわち平安時代前期にその時期をおけるであろう。

註

（1）河瀬信幸ほか「杉垣内遺跡」『昭和61年度県営ほ場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告　第１分冊』三重県教育委員会　1987年

（2）増田安生「堂ノ後遺跡」『昭和61年度県営ほ場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告　第１分冊』三重県教育委員会　1987年

（3）『昭和61年度三重県埋蔵文化財発掘調査年報』三重県教育委員会　1987年

（4）「天神山古墳群」『近畿自動車道（久居～勢和間）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』三重県教育委員会　1986年の中で資料紹介されている。

（5）「平林古墳群」『近畿自動車道（久居～勢和間）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』　三重県教育委員会　1986年

（6）『松阪市史第二巻史料編考古』松阪市史編纂委員会　1978年

（7）昭和63年度と平成元年度、三重県教育委員会および三重県埋蔵文化財センターにより発掘調査

（8）昭和62年度と平成元年度、三重県教育委員会および三重県埋蔵文化財センターにより発掘調査

（9）平成元年度、三重県埋蔵文化財センターにより発掘調査

（10）同上

（11）「榎長遺跡」『近畿自動車道（久居～勢和間）埋蔵文化財発掘調査概要Ⅱ』三重県教育委員会　1986年

（12）昭和63年度の三重県教育委員会による発掘調査は本遺跡トレンチの東側の地区の南隣で行われ、中世の遺構・遺物が発見された。『昭和63年度三重県発掘調査年報』三重県教育委員会　1989年

（13）平成元年度、三重県埋蔵文化財センターにより発掘調査

（14）新田洋「平安時代～中世における煮沸用具－「伊勢型」鍋－に関する若干の覚書」『三重考古学研究』Ⅰ　1985年
伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する－試論」『Mie history』vol.1　三重歴史文化研究会　1990

（15）『三重県斎宮跡調査事務所年報1982』三重県教育委員会・

三重県斎宮跡調査事務所　1983年
(16)『愛知県猿投山西麓古窯跡群分布調査報告（Ⅲ）』愛知県教育委員会　1983年
(17) 小林秀氏の御教示による。
(18) 註（11）に同じ
(19)「薮ノ下遺跡」『近畿自動車道（久居～勢和間）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』三重県教育委員会　1987年
(20)「新田遺跡」『近畿自動車道（久居～勢和間）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』三重県教育委員会　1986年
(21) 小笠原好彦「近畿地方の７・８世紀の土師器の流通」『考古学研究27巻２号』考古学研究会　1980年
(22) 西口寿生「土師器の地域色」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所　1983年
(23)『三重県斎宮跡発掘調査概報1984』三重県教育委員会・三重県斎宮跡調査事務所　1985年
(24) 同上

出土土器観察表（No.は実測図に対応）

No.	器種	遺構（地区）	法量（cm）	調整・技法の特徴	胎　土	色調	残度数	備考	実測No.
1	土師器　甕	ＳＢ27	口径約28	口縁部ヨコナデ	密 ～１㎜	淡黄褐色	口縁>1／10		45-2
2	〃　〃	ＳＢ26	口径13.5	外面　細いハケメ 内面　ナデ	密 ～１㎜	暗褐色	口縁で1／４		43-5
3	〃　〃	ＳＫ28	口径20.4	内外面ハケメ	雲母微粒含	浅黄橙色	口縁で1／10		53-1
4	〃　〃	ＳＢ24	口径17.5	口縁部ヨコナデ 体部ハケメ	密	淡黄灰色	口縁>1／10		44-6
5	〃　〃	〃	口径15.0	ハケメ後口縁部ナデ	密 長石、雲母微粒多	淡橙灰色	口縁で1／８		44-7
6	〃　〃	〃	口径19.0	外面　ハケメ 内面　ナデ	密 ～1.5㎜	淡黄褐色	口縁>1／10		44-5
7	須恵器　杯蓋	〃	口径19.0	回転ヘラケズリ 回転ヨコナデ	～５㎜の小石含	淡青灰色	口縁>1／10		44-4
8	土師器　杯	〃	口径17.0	ナデ	密	淡橙色	口縁で1／10		44-2
9	〃　〃	〃	口径16.5	ナデ	密	橙褐色	口縁>1／10		44-3
10	〃　〃	〃	口径11.5	ヨコナデ、ナデ	やや粗 長石微粒等多	淡黄白色	口縁で1／８		44-1
11	〃　〃	ＳＫ25	口径17.2	ヨコナデ	密 クサリ礫微粒少	淡橙色	口縁で>1／10		33-7
12	〃　甕	ＳＫ21	口径21.4	口縁部ヨコナデ 体部ハケメ	～２㎜石英、長石含	にぶい褐色	口縁で1／５		54-3
13	〃　〃	〃	口径14.4	口縁部ヨコナデ 体部外面粗ハケメ、内面細ハケメ	密 ～1㎜長石、雲母微粒含	にぶい橙色	口縁で1／５	内外面でハケメ原体異なる	54-2
14	〃　〃	ＳＢ16	口径17.0	口縁部ヨコナデ 体外面ハケメ、内面ナデ	密	淡褐色	口縁で1／４		43-1
15	〃　〃	〃	口径16.6	口縁部ヨコナデ 体外面ハケメ、内面ナデ	密 雲母、長石微粒含	浅黄橙色	口縁で1／８		54-6
16	〃　〃	〃	口径24.6	口縁部ヨコナデ 体外面ハケメ、内面ナデ、ケズリ	～２㎜小石粒	灰褐色	口縁で1／４		52-2
17	製塩土器	ＳＫ13	―	外面ユビオサエ 内面ハケメ、ユビオサエ	粗 ～４㎜小石多	橙褐色	小片	径不明	34-6
18	土師器　杯	〃	口径14.0 高　3.2	口縁部ヨコナデ、体部ユビオサエ	密	淡褐色	４／５		34-1
19	黒色土器　椀	〃	底径 7.2	はり付け高台	～２㎜長石粒含	外 淡茶色 内 黒色	高台で1／５	黒色Ｂ類	34-2
20	土師器　甕	〃	口径14.8	口縁部ヨコナデ 体外面ハケメ、体内面ナデ	～１㎜石英	外 淡橙褐色 内 淡黄褐色	口縁で>1／10		34-8

No.	器種	遺構（地区）	法量（cm）	調整・技法の特徴	胎　土	色調	残度数	備考	実測No.
21	〃　〃	〃	口径15.6	口縁部ヨコナデ 体外面ハケメ、体内面ナデ	密 長石微粒含	淡褐色	口縁で1／8	外面スス付着	34-5
22	〃　〃	〃	口径15.6	口縁部ヨコナデ 体外面ハケメ、体内面ナデ	～2㎜長石粒含	淡黄褐色	頚部で1／8		34-4
23	〃　〃	〃	口径約24	口縁部ヨコナデ 体外面ハケメ	密	淡黄褐色	口縁で>1／10	外面スス付着	34-7
24	〃　〃	〃	口径25.8	口縁部ヨコナデ 体外面ハケメ、体内面ナデ	密	淡灰褐色	口縁で1／5	外面スス付着	34-3
25	〃　杯	ＳＤ19	口径14.0	口縁部ヨコナデ 体部ナデ	密	淡黄褐色	口縁で1／4		43-3
26	土師器　椀	〃	底径 7.0	ヨコナデ　貼付高台	密	淡黒褐色	底部完存	ヘラ描文様	43-4
27	須恵器 杯蓋	ＳＫ15	口径10.2	回転ヘラケズリ 回転ヨコナデ	～2㎜小石粒含	灰色	完形		50-1
28	灰釉　椀	〃	底径 7.2	回転ヨコナデ　貼付高台	密	灰白色	底部で1／5		33-4
29	土師器　杯	〃	口径13～14	口縁部ヨコナデ	密	黄褐色	口縁で>1／10		33-5
30	〃　〃	〃	口径16.3	口縁部ヨコナデ	密	外 黒褐色 内 暗褐色	口縁で1／8		33-2
31	黒色土器 椀	〃	口径23.2	ナデ	密	外 茶褐色 内 黒色	口縁で1／8		33-3
32	土師器　甕	〃	口径25～26	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	～1㎜の長石粒少	淡褐色	口縁で>1／10	外面スス付着	33-1
33	〃　〃	ＳＫ12	口径25	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	～1㎜の長石粒少	外 暗褐色 内 淡黄褐色	口縁で1／10		33-10
34	〃　〃	ＳＫ14	口径14.3	外面ハケメ、ユビオサエ、ヨコナデ 内面ナデ	～2㎜の長石	淡橙色	口縁で1／4		53-2
35	〃　杯	ＳＫ22	口径21.2	外面口縁部ヨコナデ、体部オサエ 内面暗文	密 ～2㎜雲母長石	にぶい褐色	口縁で1／5		54-4
36	〃　〃	ＳＫ23	口径16～17	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密 石微粒少	茶褐色	口縁で>1／10		33-8
37	黒色土器 椀	ＳＫ17	口径7.2高4.7 底径 6.8	ヨコナデ、ナデ	密 雲母微粒	外 淡橙色 内 黒色	完形	黒色Ｂ	54-5
38	土師器　皿	ＳＫ18	底径 6.8	ヨコナデ、ナデ、糸切り底	密 長石、雲母微粒少	浅黄橙色			52-6
39	土師器	〃	底径 7.8	回転ヨコナデ、貼付高台	密 長石、雲母微粒少	にぶい橙色	底部完存		52-5
40	黒色土器 椀	〃	底径 8.8	ヨコナデ、貼付高台	密 雲母微粒	外 淡黄橙色 内 褐色	底部1／5	黒色Ａ類	52-4
41	山茶椀	ＳＫ３	底径 8	底部糸切	回転ヨコナデ	淡灰色	底部1／4強	高台モミガラ圧痕	35-2
42	土師器　皿	ＳＤ２	口径 9.6 高　2.2	ナデ	密	淡白褐色	口縁で1／2		49-2
43	〃　羽釜	〃	口径28.0	外面ヨコナデ、ハケメ、ケズリ 内面ヨコナデ、ユビオサエ	～2㎜長石含	淡白褐色	3／5		48-1
44	〃　鍋	〃	口径28.0	外面ヨコナデ、ハケメ、ケズリ 内面ヨコナデ、ケズリ	～2㎜砂粒含	淡褐色	2／5		49-1
45	土師器 ほうろく	ＳＫ４	口径33.8	ヨコナデ、ナデ	密 ～1㎜長石等	にぶい橙色	口縁で>1／10		52-3
46	施釉陶 摺鉢	〃	口径39.5	回転ヨコナデ、筋目13で1単位	～3㎜長石等含	暗赤褐色	口縁で1／8	施釉陶器	53-6
47	施釉陶器	〃	口径約42	回転ヨコナデ	～5㎜小石粒	暗赤褐色	口縁で>1／10		54-1
48	磁器（染付）	〃	口径 6.8	回転ヨコナデ	密	白地に青	口縁で1／4		53-3
49	〃　〃	〃	底径 4.4	回転ヨコナデ、貼付高台	密	白灰地に 暗緑色	底部完存		53-5
50	陶器	〃	底径15.0	ヨコナデ、ユビオサエ	砂粒多	外 暗赤褐色 内 赤褐色	底部で1／8	常滑焼	45-1

No.	器種	遺構（地区）	法量（cm）	調整・技法の特徴	胎　土	色調	残度数	備考	実測No.
51	〃	〃	底径16.3	回転ヨコナデ、回転ヘラケズリ	やや粗	赤褐色 底部外面灰白色	高台部で1／8		53-4
52	縄文土器 深鉢	E-25包	—	ナデ、刺突	～6㎜長石、石英、雲母	暗黄褐色	口縁破片		55-1
53	〃　〃	〃	—	ナデ	～4㎜長石、石英、雲母	暗褐色	口縁破片		55-2
54	〃　〃	E-27包	—	ナデ	～5㎜長石、石英多	暗茶色	頸部破片		55-3
55	〃　〃	D-29包	—	ナデ	～3㎜長石、石英多	淡黄褐色	胴部破片		56-2
56	〃　〃	排土・表採	—	ナデ	～5㎜長石、多	暗茶色	胴部破片		56-3
57	〃　〃	E-34包	—	ナデ	～4㎜長石、石英、雲母	暗茶色	胴部破片		55-4
58	〃　〃	D-44包	—	ナデ、縄文ＲＬ	～2㎜長石、石英、雲母	淡橙色	胴部破片		55-6
59	〃　〃	排土・表採	—	ナデ	～3㎜長石等多	外面 黒色 内面 淡黄褐色	胴部破片		56-1
60	〃　〃	E-24包	—	タテ条痕	～3㎜長石、雲母多	淡褐色	胴部破片		55-9
61	〃　〃	D-29包	—	タテ条痕？	～2㎜長石等多	淡褐色	胴部破片		55-8
62	〃　〃	D-44包	底径 7.2	ナデ	～3㎜石英、長石、雲母	白橙色	底部		55-5
63	土師器　甕	C-20包	口径15.6	口縁外面ハケメ後ヨコナデ 外面ハケメ、内面ハケメ、ケズリ	密	外 灰黄橙色 内 灰黄褐色	口縁で2／5		41-8
64	〃　〃	D-38包	口径15.8	口縁部ヨコナデ 体部ハケメ	密	外 灰褐色 内 灰橙褐色	口縁で1／5		40-6
65	〃　〃	D-44包	口径15.6	口縁部ヨコナデ 体外面ハケメ、内面ハケメ後ナデ	石英、長石、雲母、微粒含	暗褐色	口縁で1／5	外面スス付着	37-1
66	〃　〃	E-31包	口径14.0	口縁部ヨコナデ 体外面ハケメ、内面ナデ	密 石英微粒少	明黄褐色	1／8		39-5
67	〃　〃	D-44包	口径16.2	口縁部ヨコナデ	～2㎜石英、長石粒	淡橙色	口縁で1／8		37-4
68	〃　〃	F-23包	口径14.6	口縁部ヨコナデ 体外面ハケメ、内面ナデ	密 雲母微粒多	淡褐色	口縁で1／4		63-5
69	〃　〃	E-22包	口径12.5	口縁部ヨコナデ 体外面ハケメ、内面ハケメ後ナデ	～2㎜雲母、長石、石英多	褐色	口縁で1／3	風化大	62-5
70	〃　〃	C-51包	口径14.0	口縁部ヨコナデ 体外面ハケメ、内面ナデ	密 石英粒含	淡褐色	口縁で1／4		66-1
71	〃　〃	C-19包	口径14.2	口縁部ヨコナデ 体外面ハケメ、内面ナデ	やや粗 ～2㎜小石粒含	外 灰赤色 内 暗赤褐色	口縁で1／6	外面口縁部までスス付着	40-4
72	〃　〃	F-23包	口径15.4	外面ハケメ（口縁部ヨコナデ） 内面ナデ	長石、雲母、クサリ礫微粒多	淡白褐色	口縁で1／3		63-6
73	〃　〃	E-22包	口径17.2	口縁部ヨコナデ 体外面ハケメ、内面ナデ	密 ～1㎜雲母、長石多	灰褐色	口縁で>1／10		62-6
74	〃　〃	F-23包	口径14.0	口縁部ヨコナデ 体外面ハケメ、内面ナデ	～2㎜長石、石英、雲母多	淡橙色	口縁で1／8		60-6
75	〃　〃	〃	口径14.0	口縁部ヨコナデ 体外面ハケメ、内面ナデ	密 雲母微粒	淡黄褐色	口縁で1／8		61-7
76	〃　〃	〃	口径13.4	口縁部ヨコナデ 体外面ハケメ、内面ナデ	～2㎜長石、雲母、クサレ礫多	淡黄褐色	口縁で1／4		63-3
77	〃　〃	〃	口径15.8	口縁部ヨコナデ 体外面粗ハケメ、内面細ハケメ	密 ～1㎜雲母、長石含	淡黄褐色	口縁で1／3	内外面でハケメ原体異なる	63-2
78	〃　〃	D-36包	口径14.8	口縁部ヨコナデ、体部不明	やや粗 ～1㎜砂多	外 赤橙色 内 灰褐色	口縁で1／6		41-1
79	〃　〃	F-23包	口径約17	口縁部ヨコナデ 体外面ハケメ、オサエ、内面ナデ	～2㎜雲母、長石含	淡黄褐色	口縁で約1／4		61-4
80	〃　〃	D-57包	口径15.8	口縁部ヨコナデ 体外面ハケメ、内面ナデ	密 ～1㎜長石、雲母含	にぶい黄色	口縁で約1／4弱		65-4

No.	器種	遺構(地区)	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎　土	色調	残度数	備考	実測No.
81	〃　〃	F-23包	口径15.0	口縁部ヨコナデ 体外面ハケメ、内面ナデ	密 雲母、長石微粒	褐色	口縁で1／5		63-7
82	〃　〃	E-24包	口径14.6	口縁部ヨコナデ 体外面ハケメ、内面ナデ	密 ～2㎜小石有	淡黄橙色	口縁で1／5		65-1
83	〃　〃	D-30包	口径16.0	口縁部ヨコナデ 体外部ハケメ、内部ハケメ、ナデ	密	淡褐色	口縁で1／4		36-2
84	〃　〃	〃	口径16.6	口縁部ヨコナデ 体外部ハケメ	密 雲母微粒少	黄灰色	口縁で1／10	外面スス付着	36-4
85	〃　〃	F-23包	口径17.5	外面ハケメ(口縁部ヨコナデ) 内面ナデ	密 ～1㎜雲母	淡褐色	1／4	外面スス付着	61-1
86	〃　〃	E-24包	口径16.6	外面ハケメ 内面ナデ	密	暗褐色	1／2(底部欠)		51-1
87	〃　〃	E-24 F-23包	口径15.6	外面ハケメ(口縁部ヨコナデ) 内面ナデ	密 ～1㎜小石少	外 灰白色 内 淡褐色	口縁で1／6		42-2
88	〃　〃	D-30包	口径15.6	口縁部ヨコナデ 体外面ハケ、内面ナデ	密	淡黄褐色	口縁で1／5		36-3
89	〃　〃	F-23包	口径17.0	口縁部ヨコナデ 体外面粗いハケメ、内面ナデ	密 ～1㎜長石、雲母	淡橙色	口縁で1／8		60-5
90	〃　〃	〃	口径22.4	口縁部ヨコナデ 体部ハケメ	密 ～1㎜雲母多	淡赤褐色	口縁で1／9		60-2
91	〃　〃	D-44包	口径21.0	口縁部ヨコナデ 体外部ハケメ、内面ナデ	～2㎜石英	淡黄褐色	口縁で1／8		38-1
92	〃　〃	E-23包	口径19.0	口縁部ヨコナデ 体部ハケメ	密 ～1㎜石英、雲母多	淡白褐色	口縁で1／10		64-1
93	〃　〃		口径21.4	口縁部ヨコナデ 体外面細ハケメ、内面ハケメ	密 ～1㎜雲母、長石粒有	灰白色	頚部で1／5	ハケメ原体異、器壁薄手	65-5
94	〃　〃	E-22包	口径22.8	口縁部ヨコナデ 体外面ハケメ、内面ハケメ後ナデ	密 雲母、長石微粒	淡褐色	口縁で2／5		62-2
95	〃　〃	D-38包	口径19.6	口縁部ヨコナデ、体部不明	密	淡赤橙色	口縁で		40-8
96	〃　〃	F-23包	口径18.0	口縁部ヨコナデ 外面ハケメ、内面ハケメ後ナデ	密 長石、雲母、石英、クサリ礫微量	淡白橙色	口縁で1／8		61-6
97	〃　〃	〃	口径19.0	口縁部ヨコナデ 体外面ハケメ、内面不明	～1㎜長石、雲母粒、クサリ礫有	淡橙色	口縁で1／5		60-4
98	〃　〃	〃	口径20.0	口縁部ヨコナデ 体部ハケメ	密 雲母、長石微粒多	淡黄褐色	口縁で約1／9		60-3
99	〃　〃	〃	口径18.6	口縁部ヨコナデ 体外面ハケメ、内面ナデ	密 ～1㎜小石少	淡褐色	口縁で2／5		61-2
100	〃　〃	D-44包	口径23.6	口縁部ヨコナデ 体外面ハケメ、内面ナデ	～2㎜長石、石英多	淡黄褐色	口縁で>1／10		37-2
101	〃　〃	F-23包	口径19.0	口縁部ヨコナデ 体外面ハケメ、内面細ハケメ	密	淡褐色	口縁で1／5	内外面でハケメ原体異なる	61-3
102	〃　〃	〃	口径19.6	口縁部ヨコナデ 体外面ハケメ、内面不明	密 雲母、クサリ礫微量	淡橙色	口縁で1／8		61-5
103	〃　〃	E-22包	口径21.2	口縁部ヨコナデ 体外面粗ハケメ、内面細ハケメ	～3㎜石英、雲母等含	淡赤褐色	口縁で1／5	内外面でハケメ原体異なる	62-3
104	〃　〃	F-23包	口径21.8	口縁部ヨコナデ 体部ハケメ	密	淡白褐色	口縁で1／8	内外面でハケメ原体異なる	61-1
105	〃　〃	D-57包	口径31.8	口縁部ヨコナデ 体部細ハケメ	密 ～1㎜石英、雲母、クサリ礫	淡白褐色	口縁で>1／10		65-2
106	〃　〃	D-44包	口径30.6	口縁部ヨコナデ 体外面ハケメ、内面板ナデ	～2㎜石英、長石、雲母微粒多	淡黄褐色	口縁で1／10		37-5
107	〃　〃	51-包	口径28.0	口縁部ヨコナデ 体部不明	密 ～1㎜長石、雲母多	淡橙色	口縁で>1／10		65-3
108	〃　〃	D-43包	口径29.2	口縁部ヨコナデ 外面ハケメ、内面ハケメ後ナデ	密 雲母微粒多	暗褐色	口縁で1／10		64-4
109	〃　〃	E-22包	口径26.6	口縁部ヨコナデ 体外面粗ハケメ、内面細ハケメ	密 1㎜長石、雲母微粒含	外 淡褐色 内 淡黄灰色	口縁で1／10		62-4
110	〃　〃	E-24包	口径26.4	口縁部ヨコナデ 体外面粗ハケメ、内面ハケメ	密 雲母、長石微粒含	淡褐色	口縁で1／4	内外面でハケメ原体異なる	64-3

No.	器種	遺構（地区）	法量（cm）	調整・技法の特徴	胎　土	色調	残度数	備考	実測No.
111	〃　〃	F-23包	口径25.4	口縁部ヨコナデ 体外面ハケメ、内面不明	～3㎜石英含、雲母、長石微粒含	淡黄褐色	口縁で>1／10		63-4
112	〃　〃	D-44包	口径30.4	口縁部ヨコナデ 体部ハケメ	～2㎜長石等含	外 淡橙色 内 淡黄褐色	口縁で1／6	内外でハケメ原体異なる	37-3
113	〃　〃	D-43包	口径24.4	口縁部ヨコナデ 体外面ハケメ、内面ナデ	密 雲母、長石微量	淡黄褐色	口縁で1／5	内面ナデは何らかの原体使用	64-2
114	〃　〃	F-23包	口径25.2	口縁部ヨコナデ 体外面粗ハケメ、内面細ハケメ	密	淡橙色	口縁で1／4	内外面でハケメ原体異なる	63-1
115	〃　〃	E-24 E-23包	口径25.0	口縁部ヨコナデ 体外面ハケメ、内面ナデ	密	淡褐色	1／2(底部欠)	SK13と接合	46-1
116	〃　〃	E-22包	口径39.8	口縁部ヨコナデ 体部口縁内面ハケメ	雲母、石英、長石微粒多	暗褐色	口縁で1／7		62-1
117	〃　〃	D-33包	口径約32	口縁部ヨコナデ 体部ユビオサエ、ナデ	～2㎜長石、雲母	淡黄色	口縁で>1／10	時期不明	52-1
118	土師器　杯	D-45包	口径14.4 高　3.6	口縁部ヨコナデ 底部ナデ	～3㎜の小石有	淡橙色	口縁で1／5	やや雑	57-3
119	〃　〃	D-29包	口径12.4	口縁部ヨコナデ 体部ユビオサエ、ナデ	密 ～1㎜砂粒少	外 赤橙色 内 暗赤褐色	口縁で1／8		41-4
120	〃　〃	D-43包	口径14.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密 ～1㎜雲母等	橙色	口縁で1／10		67-6
121	〃　〃	D-46包	口径13.2 高　3.0	口縁部ヨコナデ 底部ナデ	密 ～1㎜長石、雲母等含	橙色	口縁で1／4		67-7
122	〃　〃	D-44包	口径14.0 高　3.0	口縁部ヨコナデ 底部ユビオサエ後ナデ	密	橙色	1／2		57-2
123	〃　〃	E-43包	口径15.4 高　3.1	ヨコナデ、ナデ	密 雲母微粒含	淡褐色	1／6		57-7
124	土師器　皿	D-45包	口径23.3	ヨコナデ、ナデ	密	淡橙色	口縁で1／6		57-4
125	〃　〃	F-23包	口径22.4 高　2.0	ヨコナデ、底部ユビオサエ	密	橙褐色	口縁で1／9		67-3
126	〃　〃	D-43包	口径16.7	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密 ～1㎜雲母、クサリ礫有	橙色	口縁で>1／10		67-5
127	〃　〃	F-23包	口径13.6 高　2.2	口縁部、ヨコナデ 体部ユビオサエ	密	橙褐色	1／8		39-2
128	〃　高杯	D-21包	——	外面ヘラケズリ 内面ナデ	密	赤茶色	脚部残		59-4
129	〃　杯	D-43包	口径14.0 高　3.0	口縁部ヨコナデ 底部ナデ	密 長石、雲母少	淡橙色	口縁で1／6		67-3
130	〃　〃	〃	口径14.8	口縁部ヨコナデ	密 ～1㎜長石、雲母、クサリ礫含	橙色	口縁で1／4		67-4
131	〃　〃	D-38包	口径12.6	口縁部ヨコナデ 底部ユビオサエ	密 ～2㎜砂粒少	淡黄橙色	口縁で1／6		40-7
132	〃　皿	D-46包	口径17.6 高　2.2	口縁部ヨコナデ 底部ユビオサエ	～2㎜長石多、～4㎜小石粒含	橙色	口縁で1／3		67-8
133	〃　〃	F-23包	口径16.0 高　2.3	口縁部ヨコナデ 体部ユビオサエ	密	赤褐色	1／6		39-1
134	〃　〃	E-35包	口径14.4	口縁部ヨコナデ 体底部ユビオサエ	密	赤褐色	口縁で1／6		39-8
135	〃　〃	D-44包	口径15.8	口縁部ヨコナデ 体部ユビオサエ後ナデ	密	淡橙色	1／6		57-1
136	黒色土器　椀	D-36包	口径12.6 高　4.0	外面ナデか 内面ヘラミガキ	密	外 淡褐色 内 灰褐色	口縁で>1／10		40-9
137	土師器　杯	D-46包	口径13.0	口縁部ヨコナデ 体部ユビオサエ	～2㎜長石、石英、クサリ礫含	灰白色	口縁で1／4		67-9
138	〃　〃	C-51包	口径14.3 高　2.7	口縁部ヨコナデ 体部ユビオサエのちナデ	密	淡橙色	口縁で1／10		57-5
139	〃　〃	D-29包	口径14.0	口縁部ヨコナデ 底部ユビオサエ	密	橙褐色	口縁で1／8		41-5
140	〃　〃	C-20包	口径12.3	口縁部ヨコナデ 体部ユビオサエ	密	外 灰赤褐色 内 淡褐色	口縁で1／6		42-1

No.	器種	遺構(地区)	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎　土	色調	残度数	備考	実測No.
141	〃　〃	E-31包	口径13.2	口縁部ヨコナデ 底部ユビオサエ	密	明黄褐色	口縁で1／6		39-4
142	〃　〃	F-23包	口径17.0 高　4.1	ユビオサエ、ナデ	密	淡黄褐色	1／2		47-2
143	〃　〃	D-29包	口径14.2	口縁部ヨコナデ 底部ユビオサエ	密	灰橙色	口縁で>1／10		41-3
144	〃　〃	排土	口径13.2	口縁部ヨコナデ 体部ユビオサエ	～2㎜長石、クサリ礫含	淡橙色	口縁で1／5		67-10
145	製塩土器	D-23包	口径13.8 底径12.7	外面ユビオサエ 内面ヨコハケ、ユビオサエ	白砂粒多	淡橙色	1／5		47-1
146	〃　〃	E-35包	口径約13.5 高　5.2	ナデ、ユビオサエ	2～3㎜の小石粒多	赤褐色	>1／10		40-1
147	土師器　鉢	F-23包	口径26.6	ヨコナデ、ナデ	密 (若干長石含)	淡黄褐色	口縁で>1／10		47-4
148	〃　皿	E-35包	口径 8.2 高　1.5	回転ヨコナデ 糸切り痕	密 ～1㎜長石含	淡黄褐色	口縁で1／4		39-7
149	〃　椀	D-36包	底径 5.6	ヨコナデ 高台貼付	やや粗 ～2㎜小石	淡褐色	2／5		40-10
150	須恵器　杯	C-8包	口径10.0 高　2.9	回転ヨコナデ、ナデ ヘラ切り後未調整	～2㎜長石等多、雲母微粒	灰色	完形		58-9
151	〃　壷	51～包	口径 9.8	回転ヨコナデ	密 石英微粒有	淡灰色	口縁で1／4		58-4
152	〃　〃	E-23包	底径 5.6	回転ヨコナデ、貼付高台	～2㎜石英、長石粒	灰色	底部で1／2		67-1
153	〃　蓋	D・E51～包	口径18.4	回転ヘラケズリ 回転ヨコナデ	密	淡灰色	口縁で1／7		59-2
154	〃	E-23包	底径13.0	回転ヨコナデ、底部ヘラ切り 貼付高台	～4㎜長石等	灰色	底部で1／4		68-2
155	灰釉　椀	D-30包	口径16.0	回転ヨコナデ	密	淡灰色	口縁で1／10	外面施釉	36-5
156	〃　椀	F-23包	口径15.7	回転ヨコナデ	密	明緑灰色	1／8	外面施釉	39-3
157	〃　〃	D-41包	底径 7.4	回転ヨコナデ、貼付高台 回転ヘラケズリ後ナデ	密	灰色	底部完形		58-3
158	〃　〃	D-30包	底径 7.0	回転ヨコナデ 底部糸切り、貼付高台	密	淡灰色	底部で1／5		36-6
159	〃　〃	C-55包	底径 7.0	回転ヨコナデ、貼付高台 底部ヘラ切り後ナデ	密	灰色	底部完存		58-5
160	〃　段皿	D-43包	口径18.8 高3.3底径9.0	回転ヨコナデ、貼付高台	密	淡灰色	口縁で1／5		59-1
161	須恵器　壷	D-15包	底径 8.6	外面回転ヘラケズリ、貼付高台 内面回転ヨコナデ	～3㎜石英、長石多	灰色	底部で1／4		58-6
162	〃　〃	D-51包	底径 8.2	回転ヨコナデ 貼付高台	密 石英、長石微粒	白灰色	底部で1／3		58-1
163	〃　〃	D-17包	底径13.6	回転ヨコナデ 底部ヘラ切りか？、貼付高台	密	淡灰色	底部で1／4		58-8
164	〃　〃	D-36包	底径 8.8	回転ヨコナデ 糸切り痕、貼付高台	密	淡灰色	底部で1／5		41-2
165	須恵器	E-35包	底部 8.8	回転ヨコナデ、貼付高台 糸切り痕	密	灰黄色	底部1／3		39-9
166	〃	E-23包	底径 9.2	回転ヨコナデ、貼付高台	～1㎜長石等含	灰色	高台部で1／4		67-2
167	〃	〃	口径24.6	回転ヨコナデ	～1㎜長石含	灰色	口縁で1／8		69-2
168	〃	〃	底径14.8	外面タタキ 内面ナデ	～3㎜長石等	淡灰色	底部で1／8		68-1
169	〃　甕	E-19包	―	タタキ	密	灰色	胴部小片		69-3
170	〃　〃	C-19包	―	タタキ	密	灰色	胴部小片		68-5

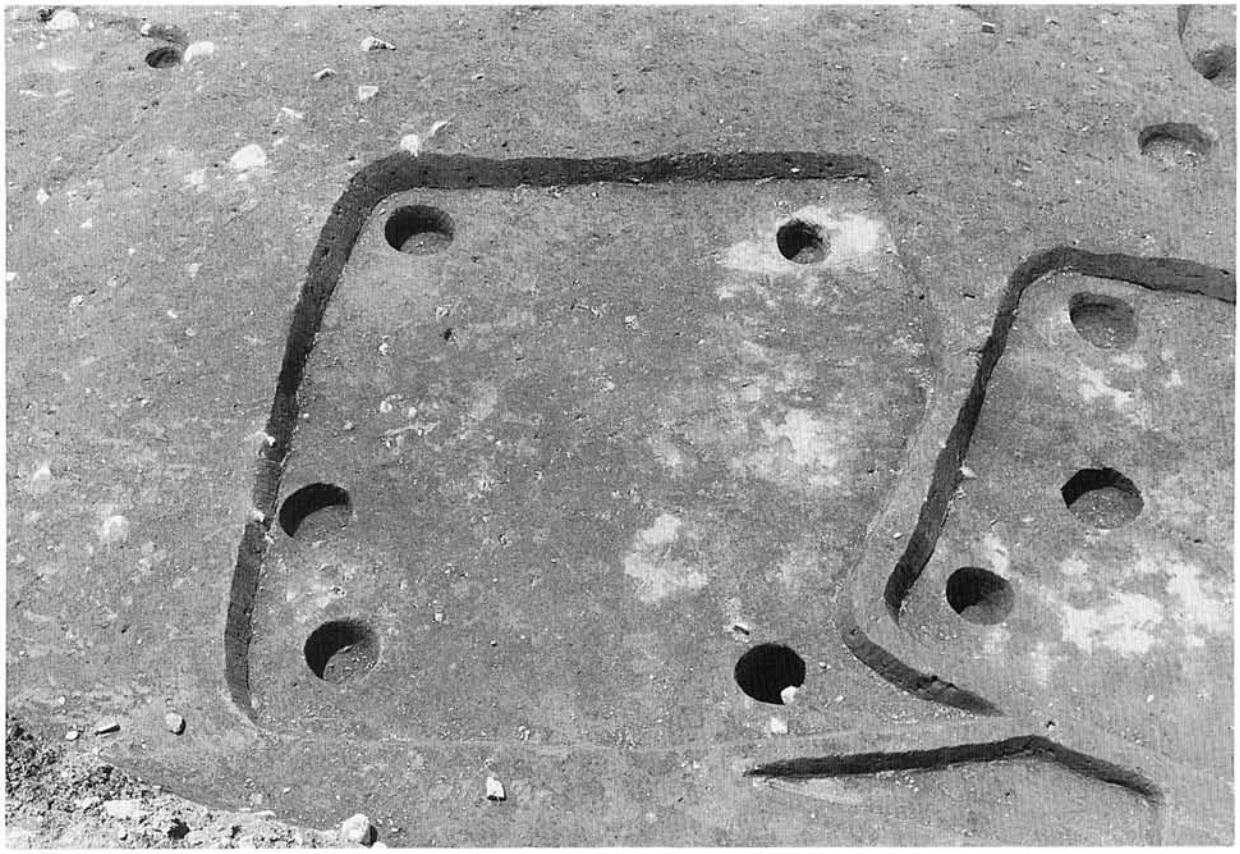
No.	器種	遺構 (地区)	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎　土	色調	残度数	備考	実測 No.
171	〃　〃	E-24 F-23包	—	タタキ	密	灰色	胴部		68-3
172	〃　〃	E-23包	—	外面タタキ 内面ナデ	密	灰色	頚部>1／10		69-1
173	山茶椀	D-57包	底径 8.3	回転ヨコナデ 底部糸切り、貼付高台	～2㎜石英、長石多	灰色	底部で1／3		58-2
174	〃	D-45包	口径 9.8 高3.1底径5.8	回転ヨコナデ、貼付高台	雲母、石英微粒	淡灰色	口縁で1／5		58-10

PLATE

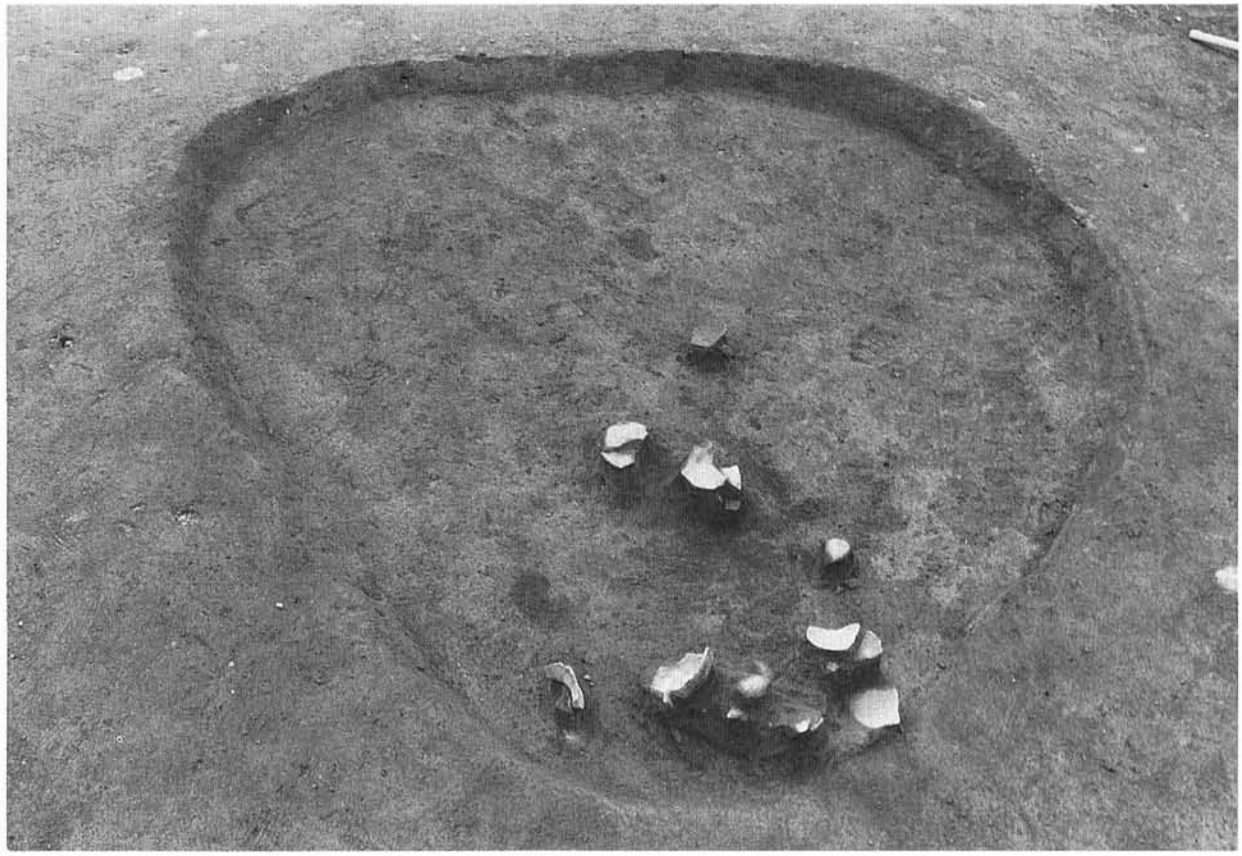
調査前風景（西から）

作業風景（東から）

竪穴住居ＳＢ８～ＳＢ11（南から）



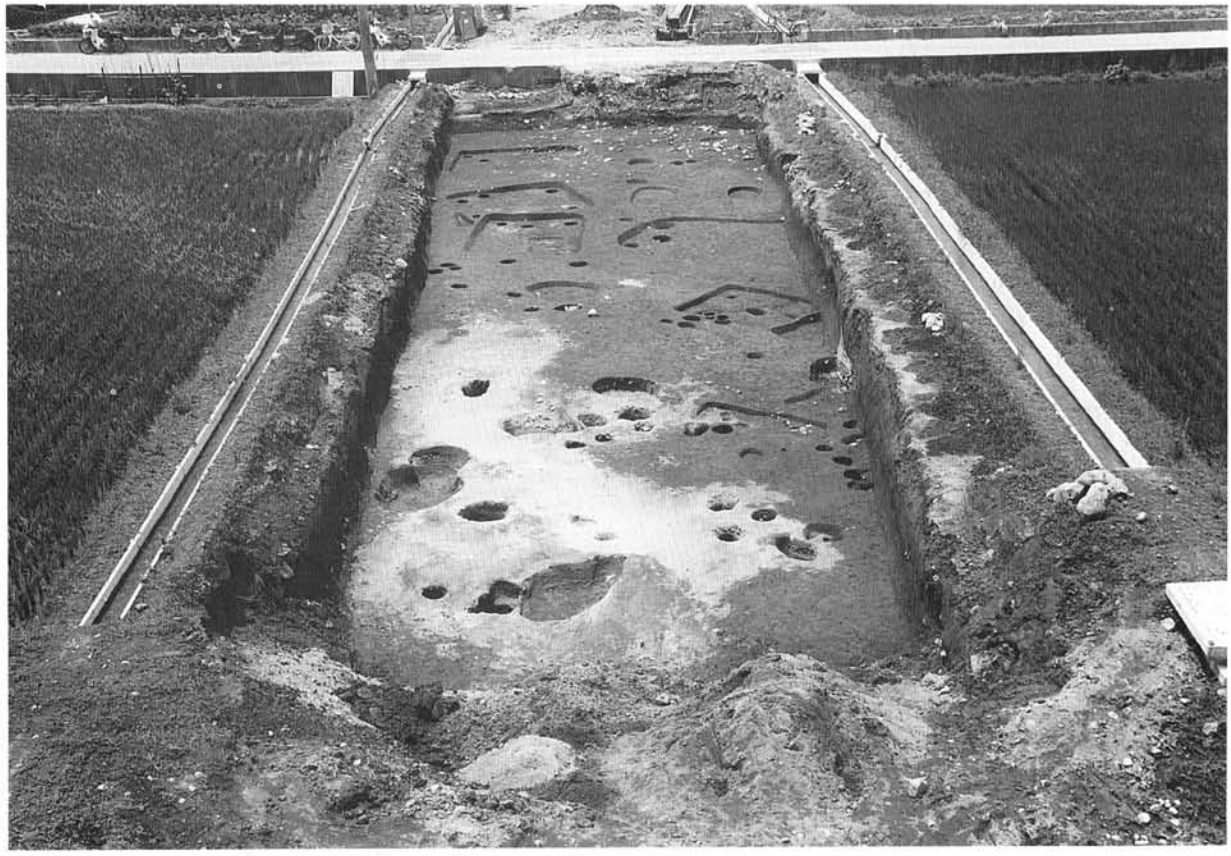
竪穴住居ＳＢ26（右）とＳＢ27（南から）



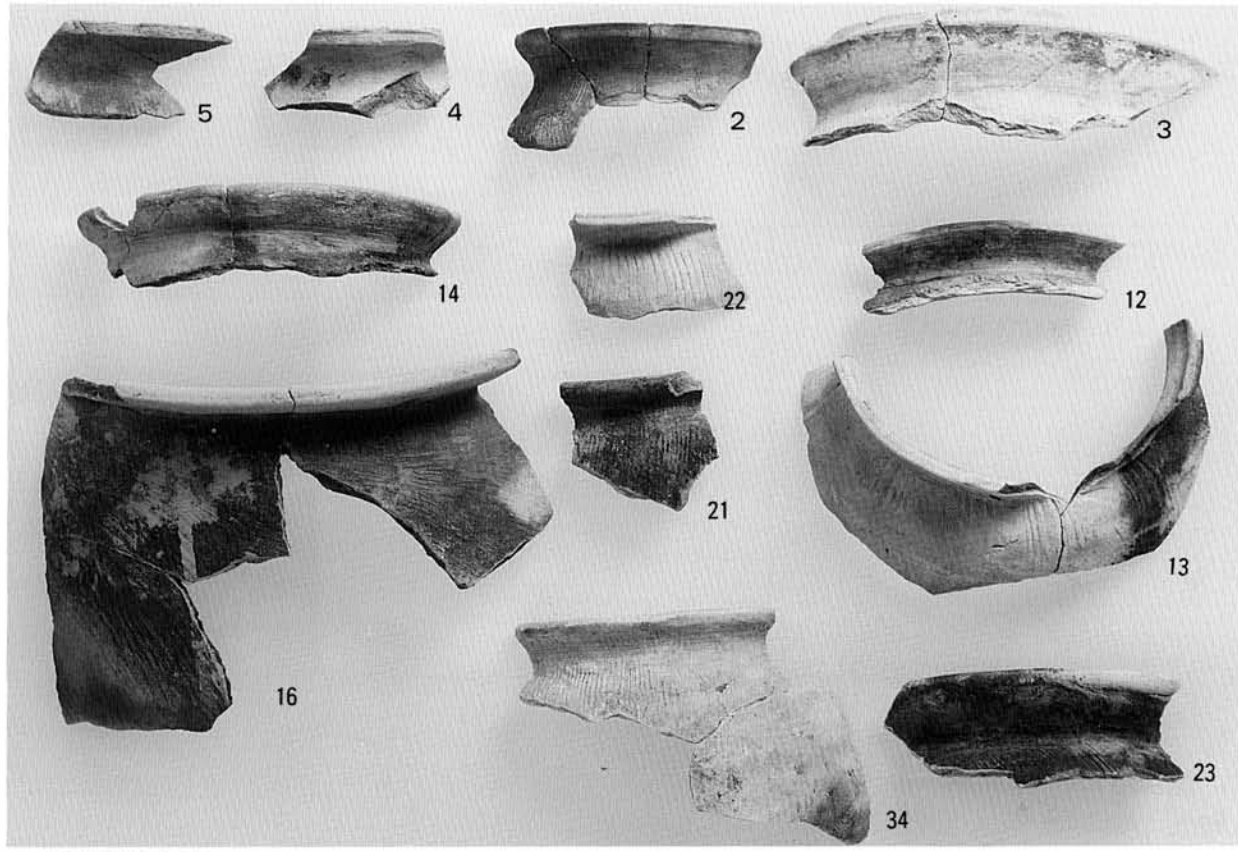
土坑ＳＫ15（東から）

溝ＳＤ１・２（西から）

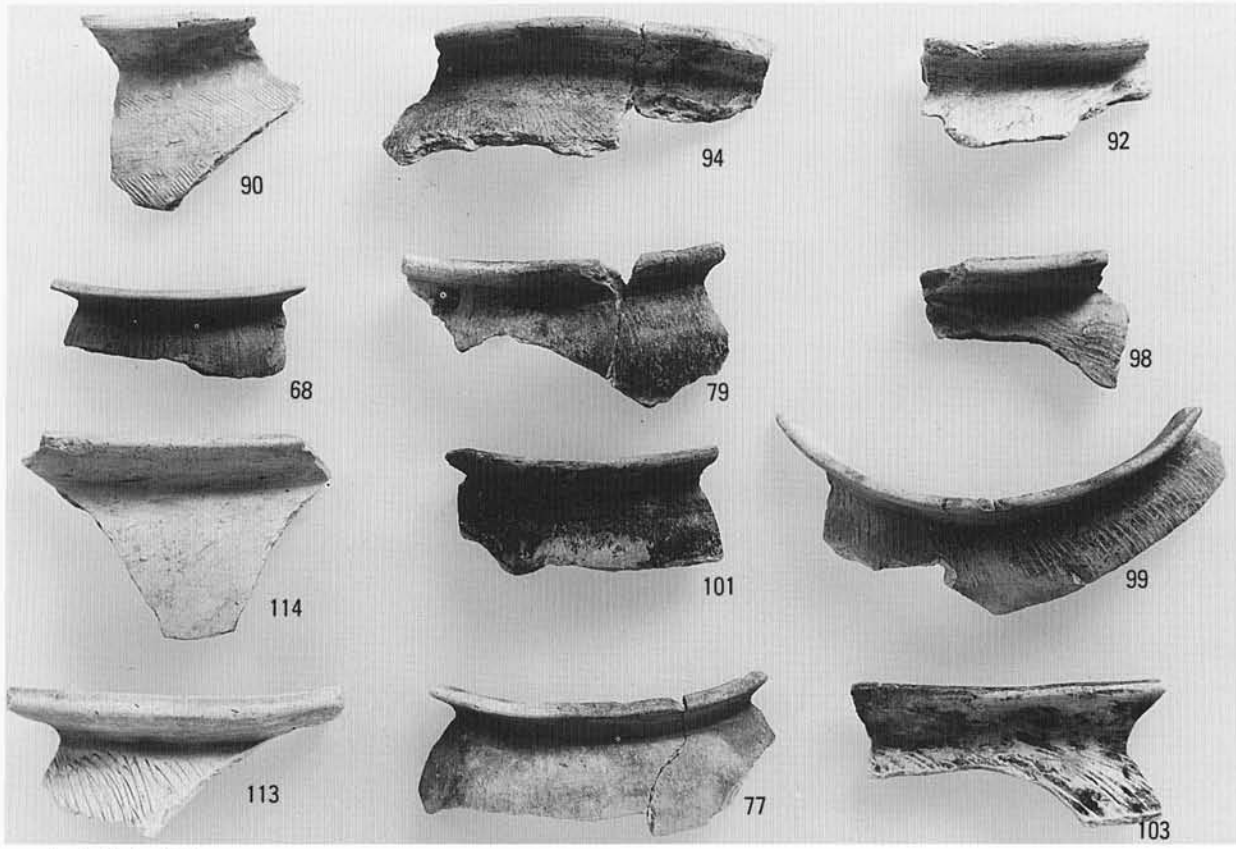
全　景（東から）



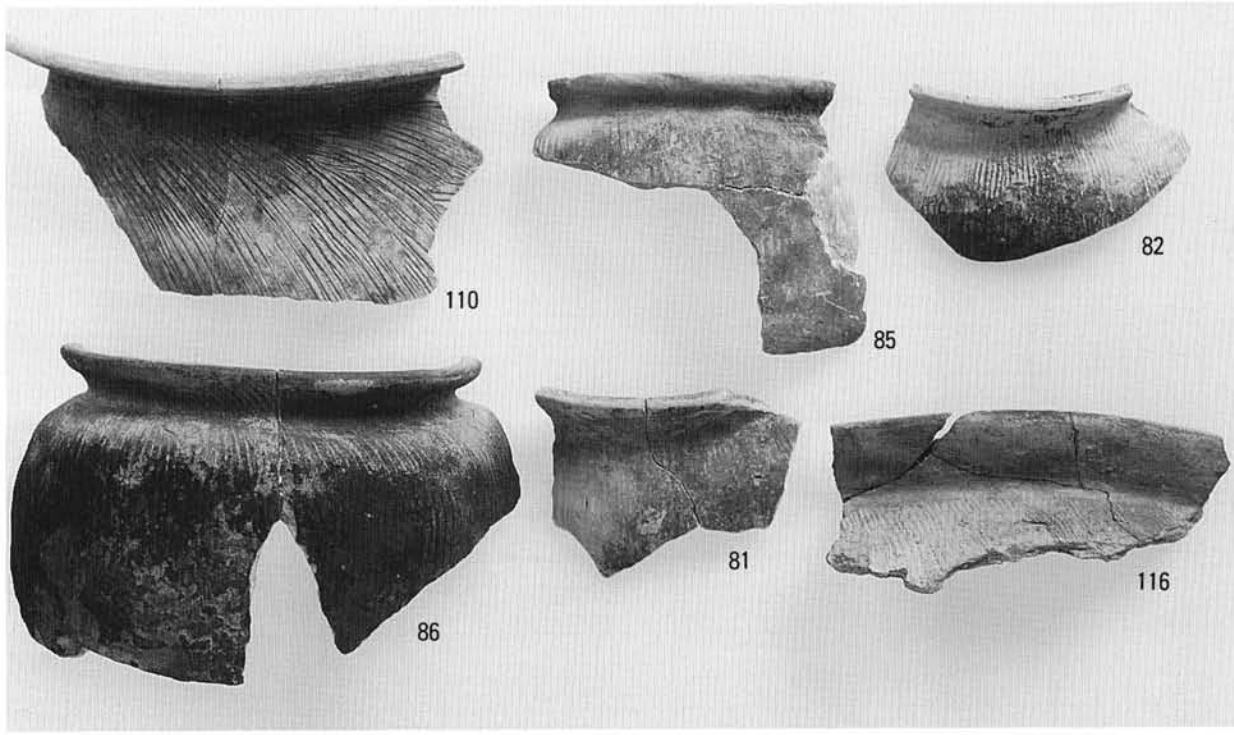
全　景（道路より東の部分、東から）



各遺構出土甕

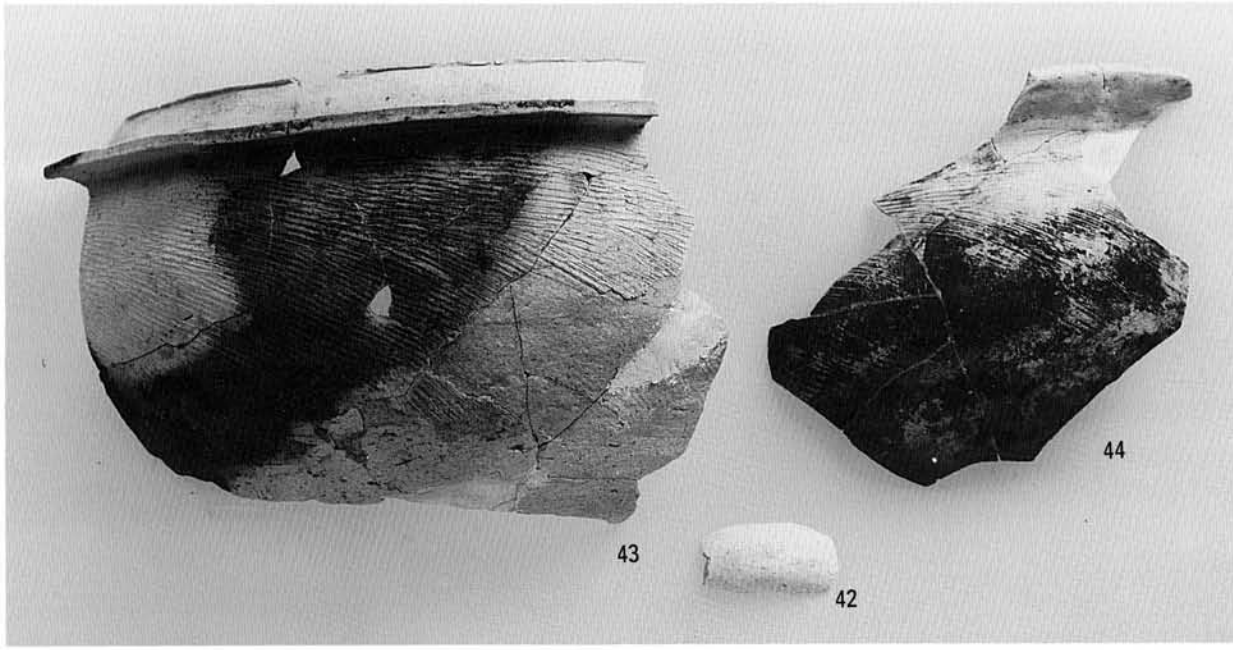


包含層出土甕

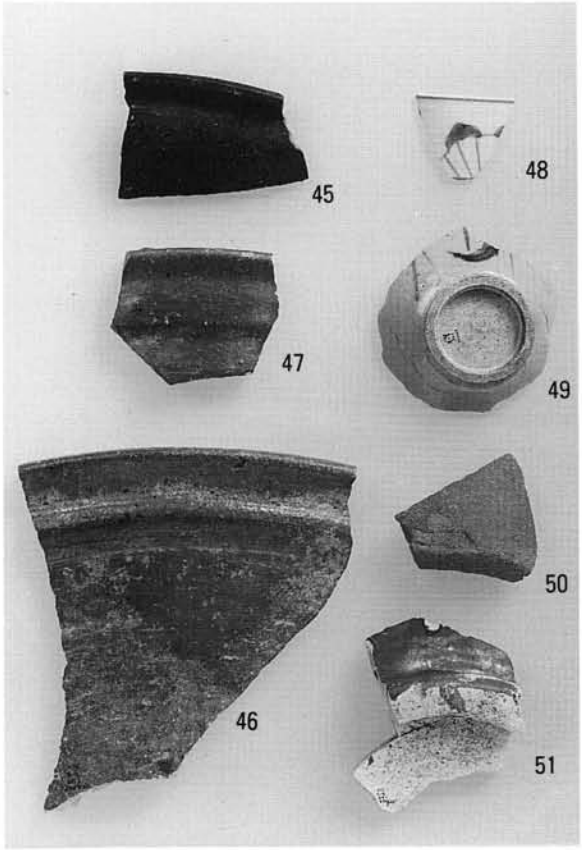


包含層出土甕

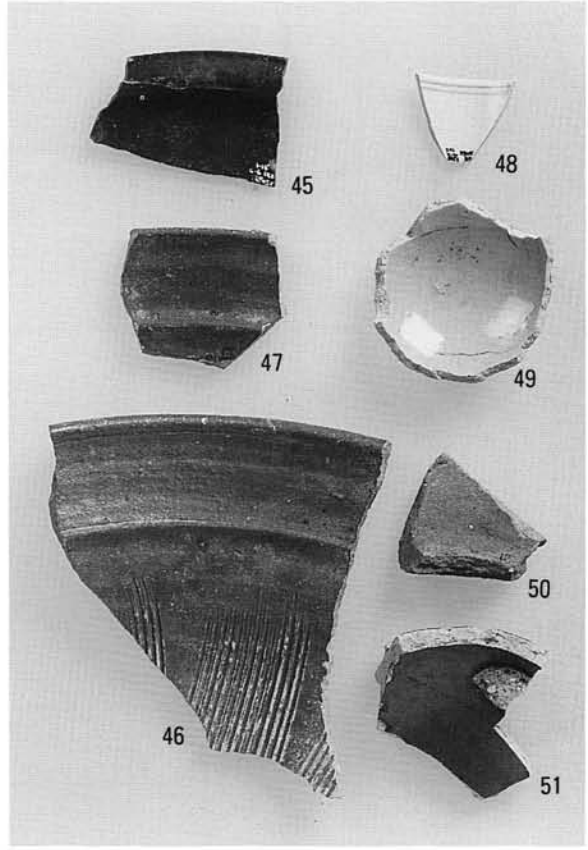
包含層出土甕（S≒¼）



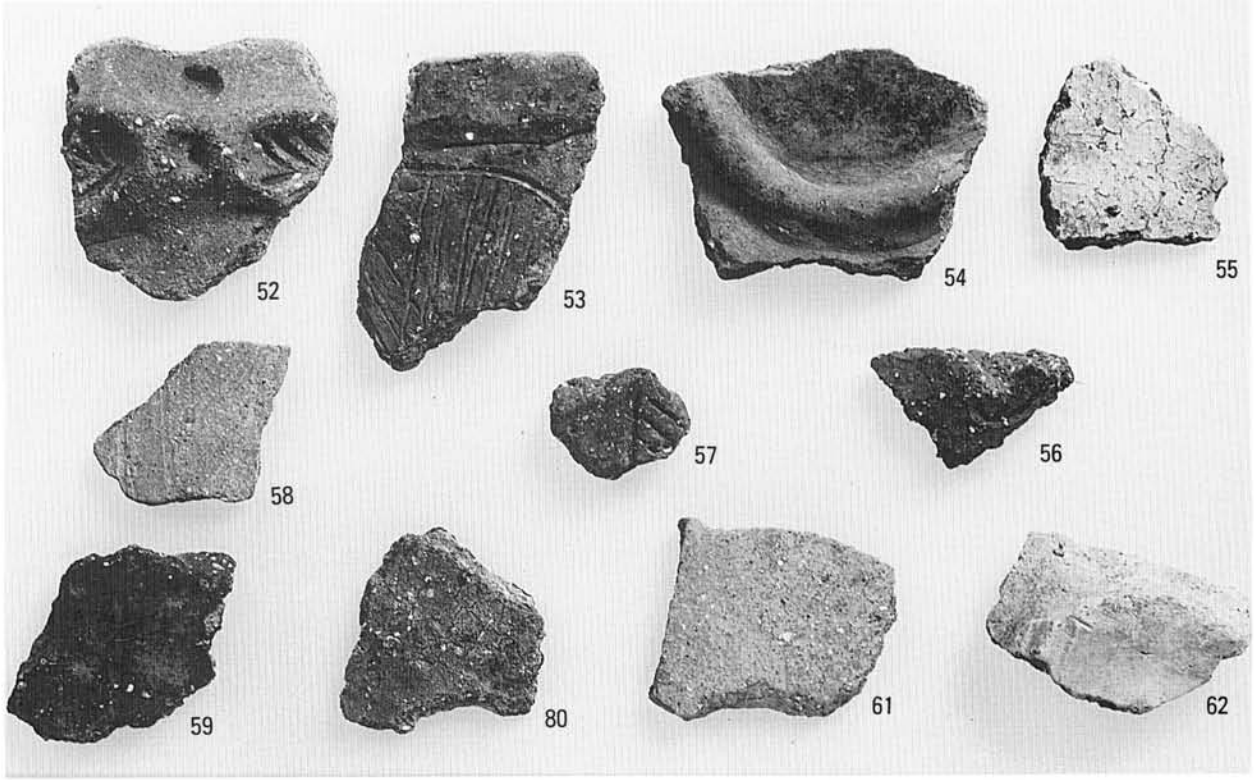
溝ＳＤ２出土土器（Ｓ＝１／３）



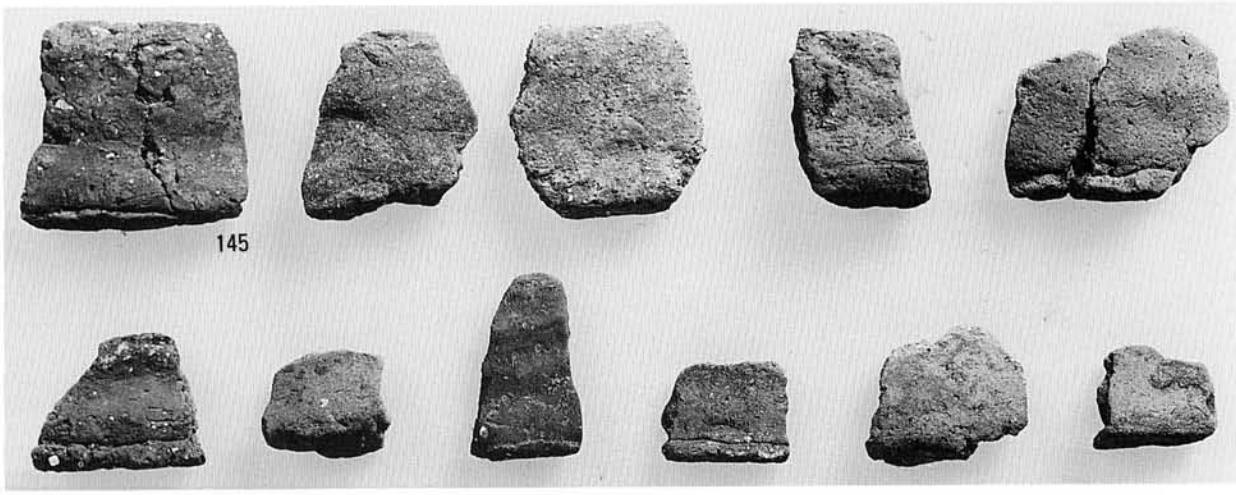
土坑ＳＫ４出土土器 外面（Ｓ＝１／３）



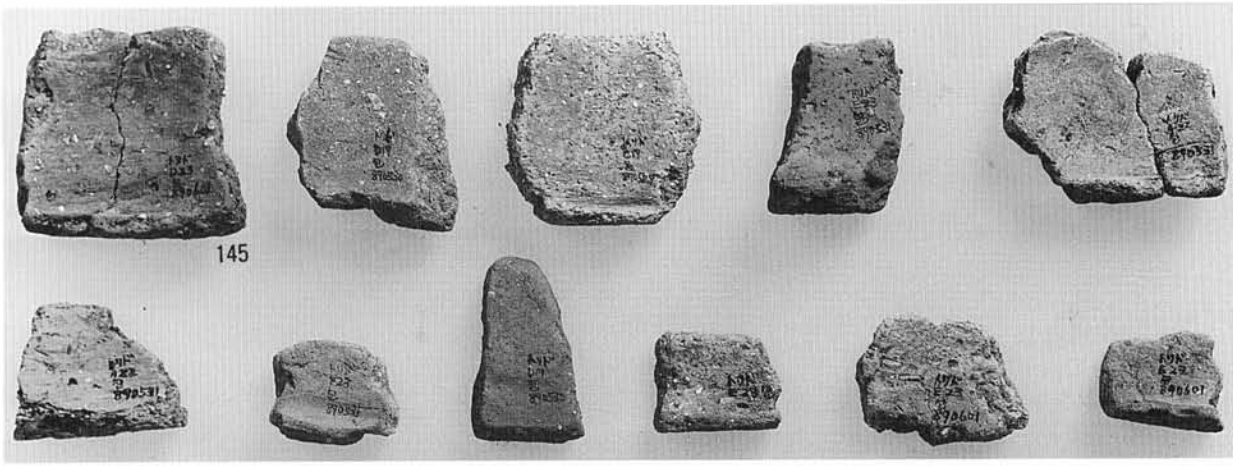
同　（内面）



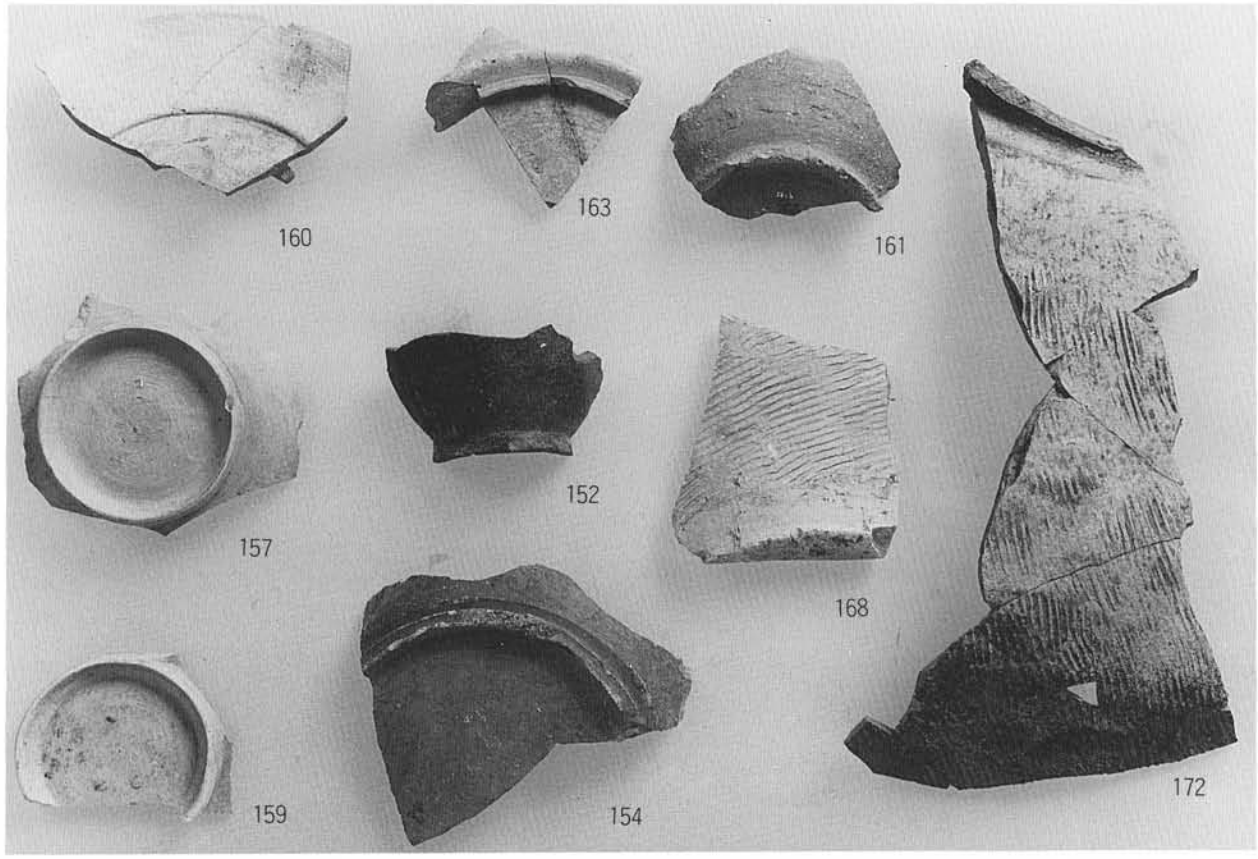
縄文土器



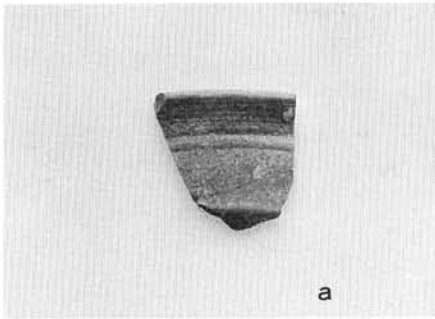
製塩土器（外面）



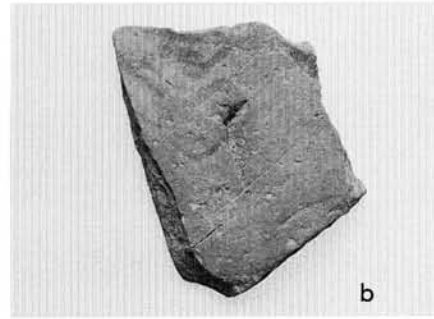
同　（内面）



包含層出土　須恵器、灰釉陶器



縁釉段皿（実大）



墨書土器（実大）

平成2(1990)年3月に刊行されたものをもとに
平成18(2006)年11月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告 91

県道合ヶ野・松阪線道路改良事業に伴う

鳥戸遺跡発掘調査報告

1990年3月

編　集
発　行　　三重県埋蔵文化財センター

印　刷　　有限会社 第一プリント社